

紺屋町ダイラクボウ遺跡

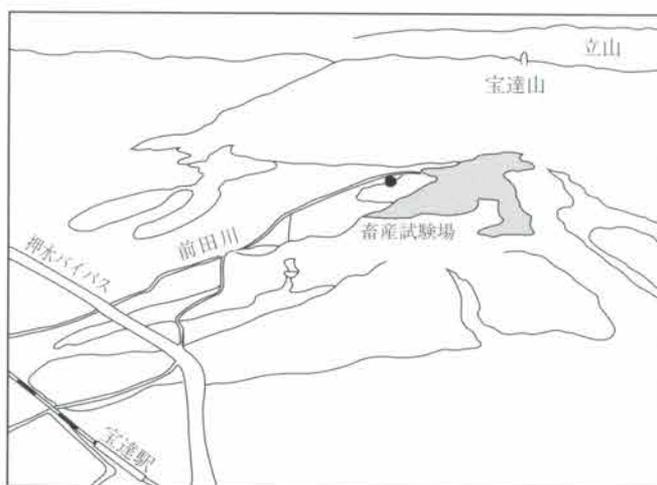
広域営農団地農道整備事業羽咋地区に
係る埋蔵文化財発掘調査報告書(その1)

1994

石川県立埋蔵文化財センター

紺屋町ダイラクボウ遺跡

石川県立埋蔵文化財センター



遺跡(●印)は宝達山の西方山麓を流れる前田川の左岸に位置する。前田川が形成した扇状地には、縄文時代中期以降の集落遺跡が分布する。



(1) 縄文時代の貯蔵穴群



(2) 第8号貯蔵穴

紺屋町ダイラクボウ遺跡

目 次

	頁
第1章 序 説	1
第2章 紺屋町ダイラクボウ遺跡の環境	2
第1節 位置と地理的環境	
第2節 歴史的環境	
第3章 調査の経緯と経過	7
第4章 第1次調査の遺構と遺物	8
第1節 概 要	
第2節 A地区の遺構と遺物	
第3節 B地区の遺構と遺物	
第4節 貯蔵穴出土の植物遺体	
第5章 第2次調査の遺構と遺物	30
第1節 概 要	
第2節 上段平坦面の遺構と遺物	
第3節 下段平坦面の遺構と遺物	
第6章 ま と め	46

図 版 目 次

巻首図版第 1	空中写真	
巻首図版第 2	遺 構	
	(1) 縄文時代の貯蔵穴群	(2) 第 8 号貯蔵穴
図版第 1	空中写真	
	紺屋町ダイラクボウ遺跡と周辺地域	
図版第 2	空中写真・遺 跡	
	(1) 第 1 次調査区の俯瞰（北から）	(2) 調査前の遺跡近景（東から）
図版第 3	遺 構	
	(1) A 地区中央部遺構検出状況（東から）	(2) A 地区東部遺構検出状況（北から）
図版第 4	遺 構	
	(1) 沢状地形の検出状況（西から）	(2) 小川状地形の検出状況（北から）
図版第 5	遺 構	
	(1) A 地区西部の貯蔵穴群（東から）	(2) A 地区西部の貯蔵穴群（南から）
図版第 6	遺 構	
	(1) 第 1 号貯蔵穴断面	(2) 第 3 号貯蔵穴断面
図版第 7	遺 構	
	(1) 第 7 号貯蔵穴断面	(2) 第 9 号貯蔵穴断面
図版第 8	遺 構	
	(1) 第 12 号貯蔵穴	(2) 第 6 号貯蔵穴のドングリ類
図版第 9	遺 構	
	(1) 第 14 号貯蔵穴断面	(2) 第 15 号貯蔵穴断面
図版第 10	遺 構	
	(1) 第 18・20 号の貯蔵穴	(2) 第 18 号貯蔵穴のドングリ類
	(3) 第 21 貯蔵穴断面	
図版第 11	遺 構	
	(1) B 地区の検出状況（東から）	(2) 集石遺構（北から）
図版第 12	遺 物	
	第 1 次調査区出土遺物	
図版第 13	出土種実類	
図版第 14	遺 構	
	(1) 第 2 次調査上段平坦面（北から）	(2) 社殿跡検出状況（南から）
図版第 15	遺 構	
	(1) 第 1 号土坑	(2) 第 2 号土坑
図版第 16	遺 構	
	(1) 第 3 号土坑	(2) 第 3 号土坑炭化物出土状況
図版第 17	遺 構	
	(1) 第 2 次調査下段平坦面（東から）	(2) 下段平坦面遺構検出状況（西から）
図版第 18	遺 構	
	(1) 下段平坦面の調査風景（西から）	(2) 第 1 号井戸
図版第 19	遺 構	
	(1) 第 4 号土坑	(2) 第 5 号土坑
図版第 20	遺構・出土遺物	
	(1) 第 6 号土坑	(2) 第 2 次調査区出土遺物

挿 図 目 次

	頁
第1図 押水町位置図（縮尺330,000分の1）	1
第2図 周辺の遺跡分布図（縮尺25,000分の1）	3
第3図 宝達山麓の縄文遺跡分布図（縮尺25,000分の1）	5
第4図 宝達山麓の須恵器窯跡分布図（縮尺25,000分の1）	6
第5図 調査箇所と周辺地形図	7
第6図 第1次調査区配置図（縮尺1,500分の1）	9
第7図 A地区東部の遺構実測図（縮尺150分の1）	9
第8図 A地区中央部の遺構実測図（縮尺150分の1）	10
第9図 A地区西部の貯蔵穴分布図（縮尺150分の1）	11
第10図 貯蔵穴実測図(1)（縮尺30分の1）	13
第11図 貯蔵穴実測図(2)（縮尺30分の1）	14
第12図 貯蔵穴実測図(3)（縮尺30分の1）	15
第13図 貯蔵穴実測図(4)（縮尺30分の1）	16
第14図 貯蔵穴実測図(5)（縮尺30分の1）	17
第15図 貯蔵穴実測図(6)（縮尺30分の1）	18
第16図 A地区出土遺物実測図(1)（縮尺3分の1）	19
第17図 A地区出土遺物実測図(2)（縮尺3分の1）	20
第18図 B地区全体図（縮尺300分の1）	21
第19図 B地区整地土層断面実測図（縮尺60分の1）	22
第20図 B地区集石実測図（縮尺60分の1）	23
第21図 B地区出土遺物実測図(1)（縮尺3分の1）	24
第22図 B地区出土遺物実測図(2)（縮尺3分の1）	25
第23図 第2次調査区配置図（縮尺1,500分の1）	30
第24図 第2次調査区全体図（縮尺200分の1）	31
第25図 上段平坦面実測図（縮尺150分の1）	33
第26図 上段土層断面実測図（縮尺30分の1・60分の1）	34
第27図 社殿跡実測図（縮尺80分の1）	35
第28図 上段平坦土坑実測図（縮尺30分の1）	36
第29図 上段平坦面出土遺物実測図（縮尺3分の1）	38
第30図 下段平坦面実測図（縮尺150分の1）	40
第31図 下段平坦面遺構実測図(1)（縮尺60分の1）	42
第32図 下段平坦面遺構実測図(2)（縮尺60分の1）	43
第33図 下段平坦面出土遺物実測図（縮尺3分の1）	45

例 言

- 1 本書は広域営農団地農道整備事業羽咋地区に係る埋蔵文化財発掘調査報告書の第1分冊で、石川県羽咋郡押水町大字紺屋町地内に所在する紺屋町ダイラクボウ遺跡の報告書である。
- 2 発掘調査は石川県農林水産部耕地建設課施行の広域営農団地農道整備事業羽咋地区に起因し、所管の羽咋土地改良事務所の依頼を受けた石川県立埋蔵文化財センターが実施した。調査費用はいずれも同課が負担した。
- 3 現地調査は平成元年度に第1次調査、平成2年度に第2調査を実施した。調査期間は下記のとおりである。
 - 第1次調査 平成元年（1989）7月17日から同年12月15日
 - 第2次調査 平成2年（1990）6月11日から同年8月11日
- 4 調査の実施にあたっては、地元の紺屋町や東間地区の住民の方々の参加と協力をえている。
- 5 挿図中に指示した方位は全て真北である。また断面図の水準線に付した数字は全て標高で、単位はメートルである。
- 6 写真図版の出土遺物に付した番号は、挿図の番号と一致する。
- 7 本遺跡の第1次の現地調査では、渡辺 誠氏（名古屋大学文学部教授）の指導を受けている。また本書の作成にあたり玉稿をいただいている。
- 8 発掘調査および本書の作成にあたっては、次の各位よりご教示とご協力をいただいた。記して深甚の謝意を表したい。
 - 村井一郎（石川考古学研究会評議員） 松永 清（石川考古学研究会々員） 宮下栄仁（羽咋市文化課嘱託） 山本直人（名古屋大学文学部講師） 村井伸行（押水町社会教課）
- 9 本書の作成は、石川県立埋蔵文化財センター調査第一課主事川畑 誠、同センター企画調整課主事安 英樹と協議のうえで、調査第一課主事垣内光次郎が編集を行った。また第4章第4節は渡辺 誠氏、それ以外は垣内が執筆した。
- 10 発掘調査によって得られた出土遺物・写真・図面等の資料は、石川県立埋蔵文化財センターが保管している。貸し出しを行なっているので利用していただきたい。

第1章 序 説

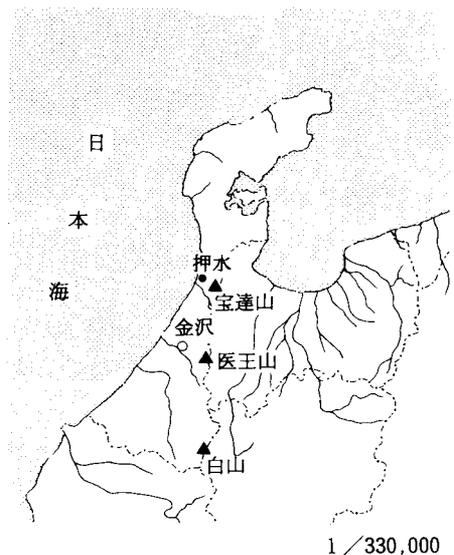
石川県の県域は、かつての加賀国と能登国の領域を併せた範囲を踏襲するすることで知られているが、なかでも県域の北半部に位置して、日本海へ大きく突出した能登半島は、日本海側でも最大の半島である。その能登半島の基部にあって、加賀・越中国境の俱利伽羅峠から中能登の七尾へ向かって走る分水嶺は、沿岸航路の標識であった三国山から能登の最高峰の宝達山を経て、山岳寺院として栄えた石動山へと続く山並みで、山麓には扇状地や沖積地などの低地を形成している。この丘陵の山麓に広がる扇状地や沖積地は、水田や畑地などの耕地として利用され、集落の大多数が展開する空間であると同時に、縄文時代以降の遺跡が数多く分布する場所である。

紺屋町ダイラクボウ遺跡はこの山並みの主峰で、標高637.4mの宝達山から流下する前田川が形成した扇状地と、その南縁の丘陵に位置する縄文時代から江戸時代の複合遺跡で、羽咋郡押水町大字紺屋町地内に所在する。

遺跡の発掘調査は、羽咋土地改良事務所が所管する広域営農団地農道整備事業羽咋地区が原因である。この広域営農団地農道整備事業羽咋地区は、能登半島の西側にあつて、南北に連なる羽咋市郡の自治体、羽咋市、富来町、志賀町、志雄町、押水町の1市4町に所在する耕地を生産基盤とする農業の生産・加工・流通システムなどが、合理的な確立が図られるための幹線道路を新設する計画として策定された事業である。事業区間は羽咋郡押水町大字紺屋町地内を南の起点として、羽咋市円井町地内までの総延長15.6kmである。

本書で報告する紺屋町ダイラクボウ遺跡は、平成元年7月から同年12月にかけて第1次調査を実施し、丘陵の裾部で縄文時代後期から晩期に設営されたと推測されるドングリ類の貯蔵穴群を検出し、丘陵部では性格が判然としない平安時代の整地面を確認している。また平成2年6月から同年8月にかけては、本遺跡の第2次調査として同一丘陵の一角で造成された上下二段の平坦面を調査し、社殿跡と判断される建物跡や僧坊的な性格が考慮される屋敷跡を確認している。

また本遺跡の第2次調査では、この広域営農団地農道整備事業羽咋地区に係る正友ヤチャマ窯跡の発掘調査を一連の事業として計画し、その調査を平成2年7月から同年10月にかけて実施している。この正友ヤチャマ窯跡の報告は、広域営農団地農道整備事業羽咋地区に係る発掘調査報告書の第2分冊として刊行しているので、本書と併せてご覧いただきたい。



第1図 押水町位置図

第2章 紺屋町ダイラクボウ遺跡の環境

第1節 位置と地理的環境

紺屋町ダイラクボウ遺跡は、石川県羽咋郡押水町大字紺屋町地内の南辺に位置する丘陵斜面に複合的に所在する遺跡で、縄文時代後期から近代までの遺構と遺物を確認しているが、その歴史的な資料が形成された空間の環境を当地の地勢から観察したい。

羽咋郡の南部に広がる押水町は、石川県の北半分を占める能登半島の基部にあって、能登国域の南端に位置する。町域の四面は、東側を県境が走り能登の最高峰宝達山（637.4m）の山並み、西側を日本海の汀線で画され、南は加賀国域の北端の河北郡高松町、北は羽咋郡志雄町に隣接する自治体である。町域は東西約10km、南北約7kmの広がりをもつが、町内の地形を東から順に概観すると、宝達山々頂から西麓の山並み、山麓の開析丘陵と扇状地、さらには季節風で発達した海岸砂丘地や後背湿地などに区分される。そしてこれらを宝達山麓に流れを発した相見川、宝達川、大坪川、前田川の小河川が、西方へと流下し、山麓には中小の扇状地を形成している。このため押水町内に分布する集落の地理的な環境は、近距離であっても相違点が多く認められ、集落や遺跡の分布状況に大きな影響を及ぼしている。

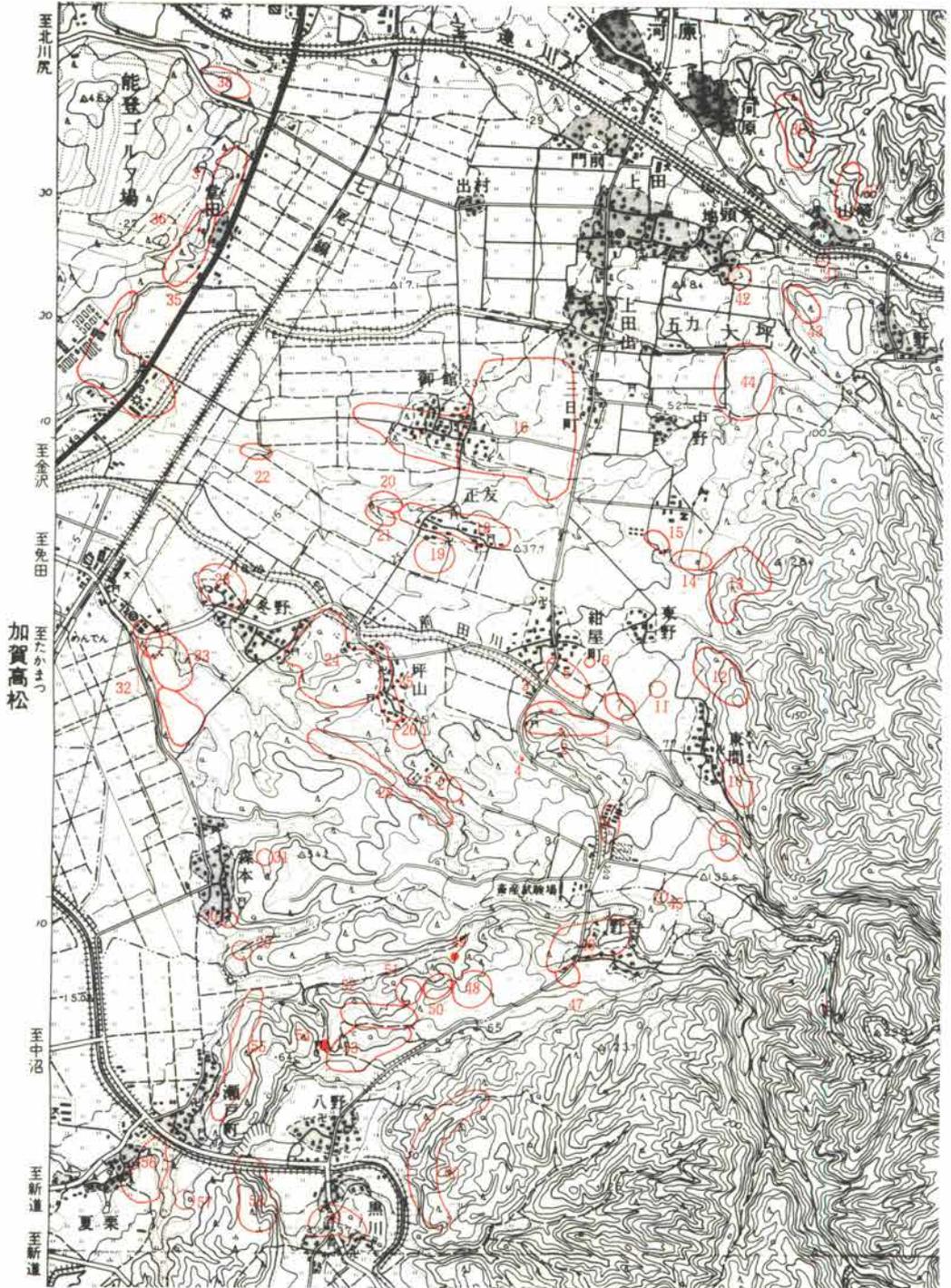
本遺跡が所在する紺屋町の集落は、押水町の南部でも宝達山の南麓から流下する前田川の右岸にあって、前田川が形成した扇状地に位置する農村である。集落は扇状地でも中央部の標高47mの地点に纏まり、かつては「お清水」と呼称された自噴井戸が幾つもあり、集落の周囲は扇状地形に規制を受けた緩やかな棚田地形の水田で取り囲まれている。その大字地は本遺跡が所在する前田川の左岸の丘陵地まで広がる。

この前田川が形成した扇状地は、宝達山麓の東間地内の標高90m地点を扇央として、扇面径約2km、高差約75mを測る小規模な扇状地で、南北の両辺と東辺を洪積台地や開析丘陵で画された範囲に広がる関係から、紺屋町の周辺の傾斜は1000分40を測り扇面の傾斜角度が強い。さらに紺屋町周辺では、縄文時代でも中期以降の集落遺跡が多く確認される点からすると、この前田川の扇状地が、地勢面で安定を迎えた時期は、縄文時代でも前期頃である可能性が高い。

第2節 歴史的環境

能登の最高峰である宝達山の山麓は、県下でも多様な考古学資料が分布する歴史空間として知られているが、本節では縄文時代と奈良時代に焦点をあて、その歴史的な環境を俯瞰したい。

宝達山麓に人的活動が確認されるのは、いわゆる「岩宿時代」と呼ばれる後期旧石器時代までさかのぼることは、押水町内でも標高20~30mの洪積台地や丘陵から、石刃やナイフブレードなどの石器群の発見からも明らかであるが、縄文時代の前期代までの資料は少なく、人々の活動規模が微弱であったと言われている。当地で住居跡などの生活遺構が確認され、人々の定住が知られるのは、縄文時代でも中期の初め頃からである。



第2図 周辺の遺跡分布図

1/25,000

第1表 周辺遺跡地名表

No.	遺跡名(押水町)	時代	No.	遺跡名(押水町)	時代
1	紺屋町ダイラクボウ遺跡	縄文・平安・中世	32	冬野小塚古墳群	古墳
2	紺屋町飯塚古墳	古墳	33	免田一本松遺跡	旧石器～古墳
3	紺屋町天神山横穴群	古墳	34	北川尻おさの山遺跡	弥生・古墳
4	紺屋町むかひの窯跡	古墳	35	上田出西山遺跡	弥生～平安
5	紺屋町ほんでん遺跡	縄文・古墳・中世	36	米出ドダヤマ中世墓	中世
6	岡部館跡	不詳	37	堂田遺跡	奈良～平安
7	東間たけのこし遺跡	縄文	38	小川A遺跡	不詳
8	紺屋町ひらき遺跡	縄文	39	河原三つ子塚古墳群	古墳
9	東間さかて山遺跡	縄文	40	山崎横穴群	古墳
10	東間ヨウショウジ遺跡	奈良～中世	41	上田永畑遺跡	不詳
11	東間ほりがいち遺跡	縄文	42	上田地頭方遺跡	縄文
12	東間宝殿山古墳群	古墳	43	上田狐塚古墳	古墳
13	正友ヤチャヤマ窯跡	奈良	44	上田うまばち遺跡	縄文
14	東野B遺跡	不詳			
15	御館ヘライバシ窯跡	奈良～平安	No.	遺跡(高松町)	時代
16	御館館跡	中世	45	野寺尼塚	不詳
17	御館遺跡	旧石器～中世	46	野寺窯跡群	古墳～平安
18	正友古墳群	古墳	47	野寺A遺跡	縄文
19	正友じんとくじま遺跡	縄文・古墳	48	八野遺跡	古墳～奈良
20	正友火葬場台地遺跡	縄文	49	八野アカサカ窯跡	奈良・平安
21	正友はちじがり遺跡	縄文	50	八野ガメ山窯跡群	奈良
22	坪山かわだ遺跡	縄文	51	八野ウワノ遺跡	縄文
23	冬野遺跡	縄文～平安	52	八野ウワノ窯跡群	古墳～平安
24	坪井山砦跡	中世	53	八野B遺跡	縄文・奈良～中世
25	坪山横穴群	古墳	54	八野クグリド窯跡	不詳
26	坪山みやの田遺跡	不詳	55	瀬戸コノウエ遺跡	古墳～平安
27	坪山あかさか窯跡	奈良	56	夏栗B遺跡	奈良・平安
28	冬野オオクボ1号窯跡	奈良	57	西山敷地谷内遺跡	弥生・平安
29	森本A遺跡	奈良・平安	58	大海西山遺跡	弥生・平安
30	森本B遺跡	奈良・平安	59	黒川古墳群	古墳
31	森本ドソウバ遺跡	中世	60	黒川ホンドノタニ窯跡群	奈良・平安

前田川扇状地を俯瞰できる台地上で、新保式期の堅穴住居跡が確認された東間さかて山遺跡の時代以降、本遺跡が立地する前田川扇状地の狭小な扇面では、中期から後期の紺屋町ほんでん遺跡、後期から晩期の東間たけのこし遺跡、晩期の東間ほりがいち遺跡などの集落遺跡が連続と営まれている。これは縄文時代の中期以降、宝達山麓域の中にあっても、前田川扇状地とその周辺の生活空間が、環境面で極めて安定した場所であり、それら集落遺跡群の動向の過程で本遺跡の貯蔵穴群は機能したと理解させる展開である。

時代が弥生時代から古墳時代へと推移する時代の集落遺跡の展開は、大海川下流から前田川下流の低地に臨んだ標高20m前後の砂丘地や台地で見られるが、これは河川下流の低地が水稻の栽培に適した耕地として認識され、その利用が推し進められた結果と理解されている。

この水田を主体とする農耕地の拡大を誘因とする集落の展開が、奈良時代以降に変化をきたすが、それは大海川流域を中心とする丘陵地で開始された窯業生産に起因する。須恵器生産を主体としたこの新たな生産活動は、生産施設である登窯の設置・素材の粘土・燃料の木材確保の三条件から、宝達山麓でも洪積期の粘土が堆積する開析丘陵で、7世紀前半から10世紀前半まで期間に継続的な操業が続いたようである。それは能登国域の南端に位置する当地が、平安時代の『和名』に「大海郷」(訓は「於保美」)と記載される郷域としての歴史的な特色でもある。

第3章 調査の経緯と経過

紺屋町ダイラクボウ遺跡の発見は、調査原因である広域営農団地農道整備事業羽咋地区に関する埋蔵文化財分布調査によるものである。昭和63年4月に県農林水産部耕地建設課から農道建設予定地内の埋蔵文化財分布調査の依頼を受けた当センターは、昭和63年7月12日に農道起点から前田川までの約500mの区間を対象とする試掘調査を実施し、同区間内で3箇所の埋蔵文化財の包蔵地を確認した。この試掘調査の結果は後日回答されたが、3箇所の埋蔵文化財とは第1次調査でA地区とした水田部と「ダイラクボウ」と小字される上下二段の平坦地である。面積は合計で約3,000㎡と算定された。

平成元年4月、県耕地建設課から発掘調査の依頼を受けた当センターは、専門員平田天秋の指導のもと主事垣内光次郎を担当として、平成元年7月17日にA地区とした水田部から着手したが、同年9月の天候不順で作業が遅れ、さらにA地区西部で縄文時代の貯蔵穴群の発見が重なり、この年は12月15日にA・B両地区での調査を完了させて終えた。調査実施面積は、2,300㎡である。またこれに先立ち広域営農団地農道整備事業羽咋地区を所管する羽咋土地改良事務所との協議で、遺跡西方にある上下二段の平坦地部分（約700㎡）の発掘調査は、次年度に改めて実施することで工事との調整が図られた。

なお第1次調査中の平成元年9月19日、同広域農道路に係る押水町正友地内の山林で、試掘による埋蔵文化財の分布調査を実施して、須恵器窯跡（正友ヤチャマ窯跡）の存在を確認した。

翌、平成2年4月に県耕地建設課より広域営農団地農道整備事業羽咋地区に係る調査依頼が当センターへ出されたので、紺屋町ダイラクボウ遺跡の第2次調査と正友ヤチャマ窯跡の発掘調査を同一事業とする調査計画で、2遺跡の調査は実施された。

平成2年6月11日に紺屋町ダイラクボウ遺跡の第2次調査として、「ダイラクボウ」と呼称される上下二段の平坦地部分から発掘調査を開始、その調査の前半を終えた7月11日から正友ヤチャマ窯跡の調査に着手して同年10月25日にこれを終了した。なお紺屋町ダイラクボウ遺跡の調査は、調査第一課主事垣内光次郎が担当し、宮下栄仁氏の協力で同年8月11日に作業を終了した。

また正友ヤチャマ窯跡の調査は、同課主事川畑誠・安英樹の両名が担当した。2遺跡の調査実施面積は、紺屋町ダイラクボウ遺跡が約700㎡、正友ヤチャマ窯跡が約1,500㎡で、合計2,200㎡である。



第5図 調査箇所と周辺地形図

第4章 第1次調査の遺構と遺物

第1節 概要

紺屋町ダイラクボウ遺跡の第1次の発掘調査は、平成元年7月17日に現地調査を開始し、同年12月15日に作業を終えている。調査範囲は第6図に図示したA・B両地区で、調査の実施面積は、両地区を合わせ約2,300㎡を測る。当初は第2次調査区の部分700㎡も調査範囲に組込んでいたが、9月の長雨で作業に大幅な遅れを生じ、平成元年度はA・B両地区の現地調査を完了させることで、本事業を所管する羽咋土地改良事務所と合意した。

調査区のA地区は、前田川の扇状地の南辺に位置する棚田の部分で、西方に向かい水田の標高が順次低下する場所である。三枚の水田区画と丘陵裾を並走する農道の状況から、このA地区の調査区をさらに、東部、中央部、西部の3ブロックに分割した。またB地区は丘陵の北側斜面に位置する小規模の平坦地で、谷部を埋め込んだ造成地との予測から地区分けをした。

A地区の調査は、東部から西に向かって進めた。東部では水田の区画整備による厚い盛土下で、標高70mの遺構面から、古代・中世の土坑や溝を検出し、中央部の標高69m前後の水田下からは、旧地形の小川状の地形や池状の窪地を検出した。これらは近世以前にあった屋敷地や自然地形の可能性が濃厚である。また北部の水田と農道の部分は、標高67m前後の丘陵裾で、等高線に沿って、縄文時代に設営されたトングリ類の貯蔵穴が、前後2列に並んで21基も検出され注目を集めた。他方、古代の造成地と予測されたB地区では、古代の土器群と中世の集石遺構を確認したが、その性格は不明である。

第2節 A地区の遺構と遺物

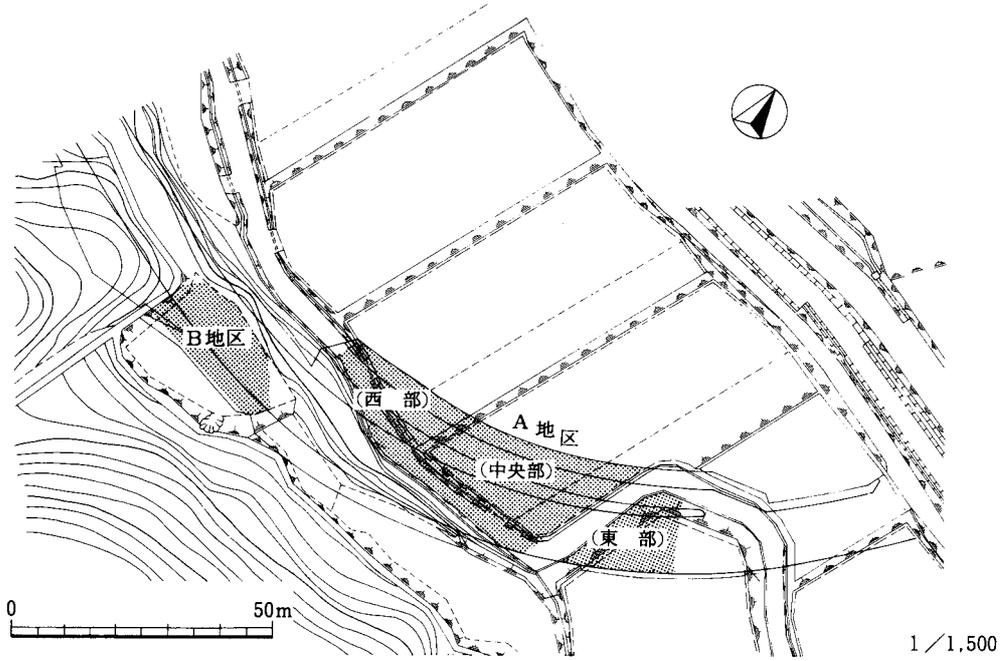
1. 東部の遺構と遺物（第7図 図版第3）

A地区の東部は、約1.5mの盛土を除去する必要から、西側の約三分の二を発掘した。標高70mの遺構面からは、溝1条、土坑3基のほかにピット15穴を検出したが、西は農道で切り落とされていた。地山は黄橙色の粘質土で、覆土は茶褐色を基本とする粘質土であった。

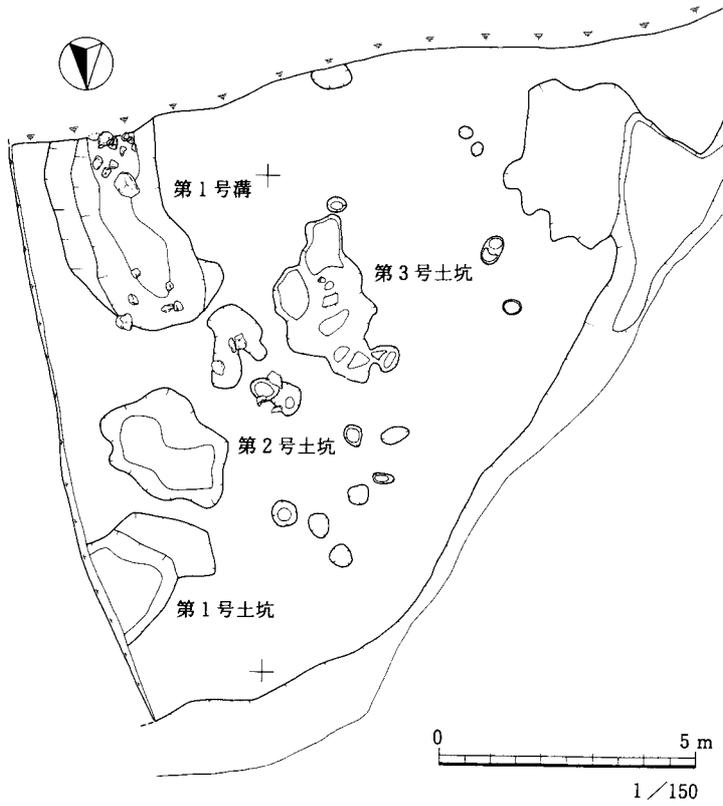
第1号溝は、上幅に対して深さが40cmと浅いが、ほぼ南北方向を示す。覆土の堆積状況と出土遺物から、室町時代前半代の溝で、屋敷の区画割りとして開削された溝と考えられる。また3基の土坑は、不整形の遺構が多く、性格と時代は判然としない。遺構内からは古代の須恵器も出土しているが、覆土の質感から室町時代に下と考えられる。

2. 中央部の遺構と遺物（第8・16図 図版第4）

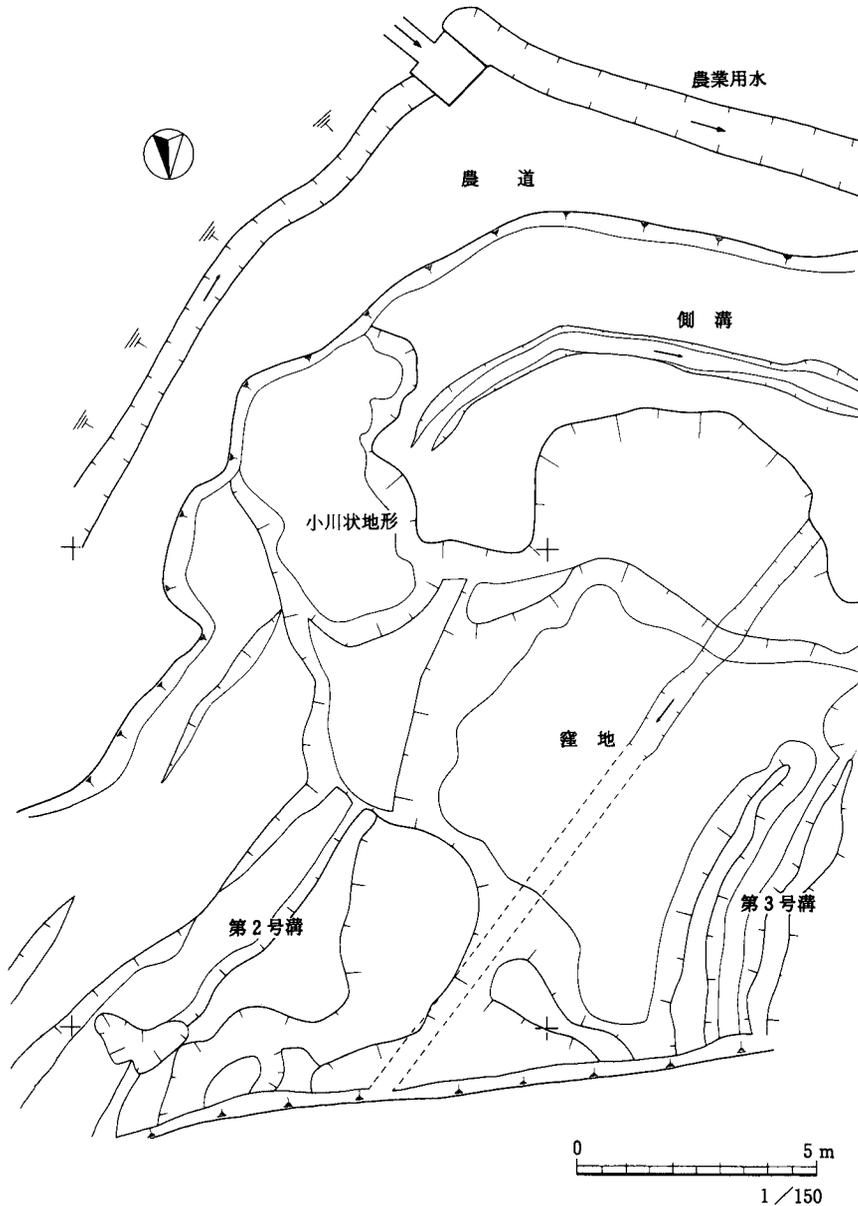
A地区の中央部では、水田の床土を除去すると、礫床と黒色粘土の旧地表が、東西に二分した状況が見られた。東側の礫床部分に堆積した粘土や砂礫中には、須恵器などが混在していた。調査を進めた結果、南方向から流下したであろう小川状の地形や池状の窪地が検出された。さらにこの小川状の地形の北側には、3条の溝が派生するが、これらは小川の流れを用水として引き込



第6図 第1次調査区配置図



第7図 A地区東部の遺構実測図



第8図 A地区中央部の遺構実測図

んだ遺構と判断される。また第8図の小川状地形からは、古代の須恵器が集中的に出土し、窪地からは中世の遺物が出土したことから、この水場の利用は平安時代までのぼる可能性もある。

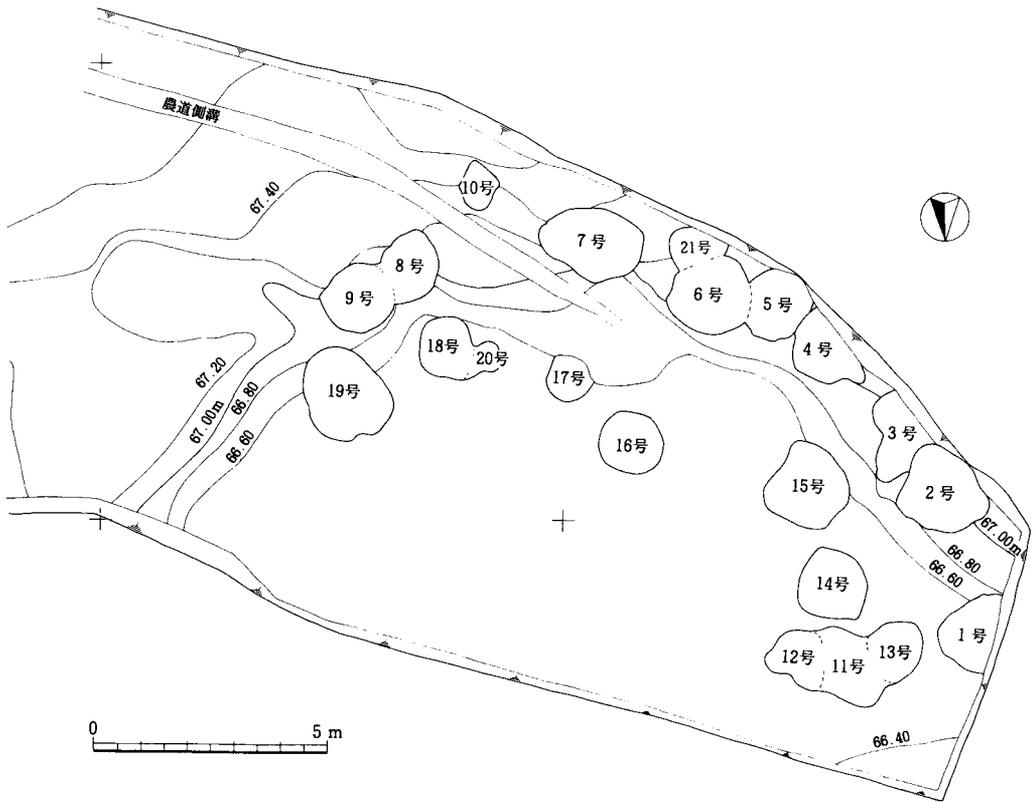
第16図はこの中央部から出土した古代から中世の遺物である。1～4は須恵器の蓋で、5～7は須恵器の坏である。胎土は灰色を呈し、1・7は転用硯の可能性が高い。8・9は瓶類で、10は壺の底部である。11の鉢を含め、8世紀後半から9世紀前半の遺物である。また12の土師器碗は12世紀前半の遺物である。12・13の土師質土器は、15の青磁碗と共に13世紀後半で、16・17の青磁碗は、珠洲焼と共に15世紀前半で、20の鉄鍋も同時期の遺物と考えられる。

3. 西部の遺構と遺物（第9図～第17図 図版第5～13）

(1) 貯蔵穴 A地区の西部は、標高66.7mの水田の南端と農道部分である。調査当初は遺物包含層が薄く、遺構の分布は希薄と予測されていたが、土坑の覆土からドングリ類が出土したことで、貯蔵穴の群在が考えられ精査を実施した結果、標高67mの等高線に沿った丘陵裾部で、大小21基の貯蔵穴群のまとまりを検出した。この貯蔵穴群は、東西17m、南北5.5mの狭小な範囲に広がり、山側と川側の前後2列で、弓なりの分布形態を呈する。これは貯蔵穴の構築条件が、当地の土質や環境と適合した結果と理解される。

A調査区の西端に位置する第1号貯蔵穴から第9貯蔵穴までの11基は、山側に列なる貯蔵穴群で、丘陵裾の粘質土部分に設営され、造り替えによる複合が、多くの貯蔵穴で認められる。これに対して、第11号貯蔵穴から第19号貯蔵穴までの10基は、川側に列なる貯蔵穴群で、丘陵と扇状地の礫床間に設営されている。上半は水田の開削で失われ、下層だけが遺存した遺構が多い。

以下、各貯蔵穴の特徴を順に述べるが、法量は第2表に一括して掲げておいた。また覆土中からドングリ類やトチノキの種子が検出された貯蔵穴は、21基中の17基で、種別としては、ドングリ類が中心で、トチノキの検出は数少ない。



1 / 150

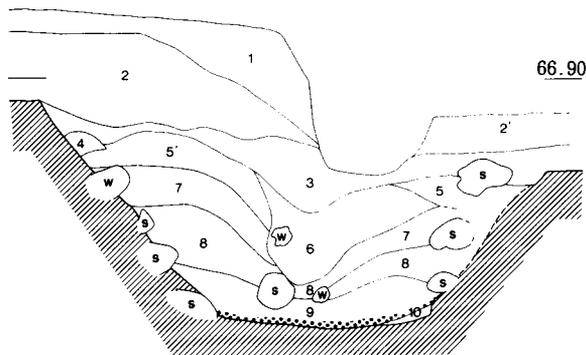
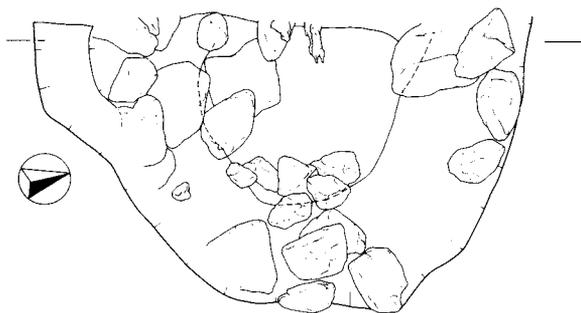
第9図 A地区西部の貯蔵穴分布図

第1号貯蔵穴は、東半分だけを発掘した。断面が逆台形を呈するが、かつては袋状に構築された大型の貯蔵穴であった可能性が高く、ドングリ類は底面から検出された。第2号貯蔵穴は、第3号貯蔵穴と複合する。旧形態は袋状と考えられ、下層の2層からドングリ類が検出された。

第3号貯蔵穴も袋状の遺構で、その東側を発掘した。上層からは礫と土器が出土し、中層から下層の3層でドングリ類が検出された。第2号貯蔵穴より先行して設営されている。第4号貯蔵穴は、第5号貯蔵穴と複合するが、新旧関係は不明である。中層から下層でドングリ類を検出している。第5号貯蔵穴も袋状形態が知られるが、規模は複合する第6号貯蔵穴より一回り小型である。下層の1層からドングリ類が検出された。第6号貯蔵穴は、袋状を呈する旧形態が良く知られる遺構で、中層には地山土と礫が堆積し、下層ではドングリ類が灰色砂層を挟み3層堆積していた。また第6号貯蔵穴と複合する第21号貯蔵穴は、検出状況からすると、本貯蔵穴より先行した設営と考えられるが、種実類の堆積は見られない。隣接する第7号貯蔵穴も同様である。

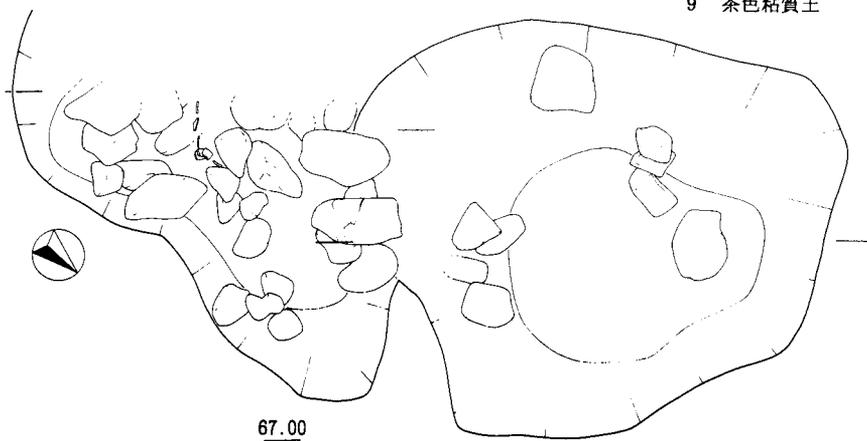
第2表 貯蔵穴一覧表

番号	長径	短径	深さ	種子 (層位)	備考
1	203	(120)	93	ドングリ類 (9層)	
2	196	172	62	ドングリ類 (下層2面)	
3	209	(106)	61	ドングリ類 (4・7・11層)	2号より古い
4	157	(141)	(65)	ドングリ類 (中～下層)	
5	(163)	(148)	63	ドングリ類 (11・17層)	6号より古い
6	180	163	82	ドングリ類 (7・14・15層)	
7	230	155	64		2基複合か
8	152	138	88	ドングリ類 (14層) トチノキ (13層)	9号より古い
9	160	159	81	ドングリ類 (11・13・14)	
10	(88)	(73)	(20)		
11	153	—	68	ドングリ類 (下層)	12・13号より古い
12	(180)	(140)	51	ドングリ類 (下層)	
13	114	—	68		
14	165	154	56	ドングリ類 (5・7・8層)	
15	176	153	49	ドングリ類 (5・6・8・9層)	
16	151	134	(34)	ドングリ類 (8～11層)	上部を失う
17	107	96	(13)	トチノキ (1層) ドングリ類 (2層)	上半を失う
18	147	120	(18)	ドングリ類 (3・4層)	20号より古い
19	223	179	(21)	ドングリ類 (2～4層)	上半を失う
20	(69)	—	(14)	ドングリ類 (1・2層)	上半を失う
21	123	—	54		6号より古い

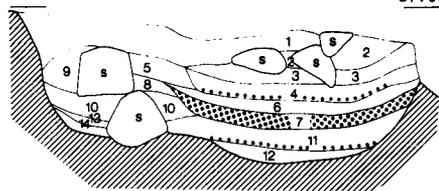


- 1 濁灰褐色粘質土 (盛土)
- 2 濁灰褐色粘質土 (旧耕作土)
- 2' 濁灰褐色粘質土 (耕作土)
- 3 明灰色粘土
- 4 地山ブロック
- 5 濁灰色砂質土
- 5' 濁灰色粘土
- 6 濁暗オリーブ灰色粘土
- 7 濁暗灰色粘質土
- 8 黒褐色粘土
- 9 茶色粘質土

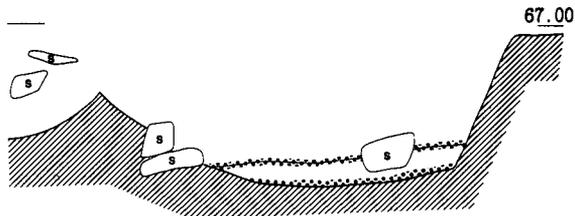
第1号貯蔵穴



67.00



第3号貯蔵穴



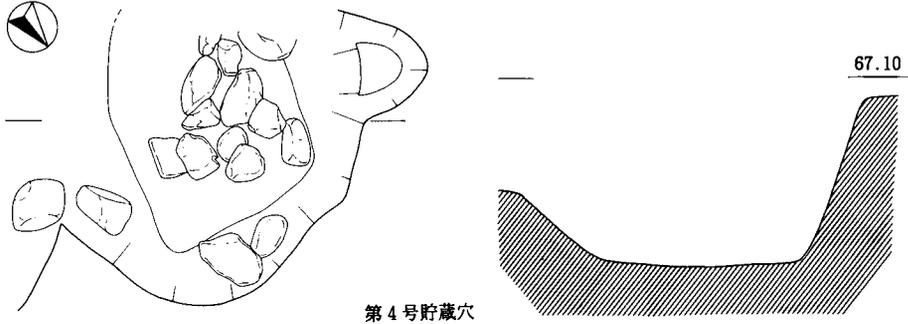
第2号貯蔵穴

- | | | |
|-----------|------------|--------------|
| 1 明黄灰色粘土 | 6 濁暗黄灰色砂質土 | 11 オリーブ灰色砂 |
| 2 黄灰色砂質土 | 7 暗灰色粘土 | 12 オリーブ灰色粘質土 |
| 3 灰色粘土 | 8 濁灰色砂 | 13 暗灰色粘土 |
| 4 濁灰色砂質土 | 9 暗灰色粘土 | 14 灰色砂 |
| 5 明黄灰色粘質土 | 10 濁黄灰色砂質土 | |

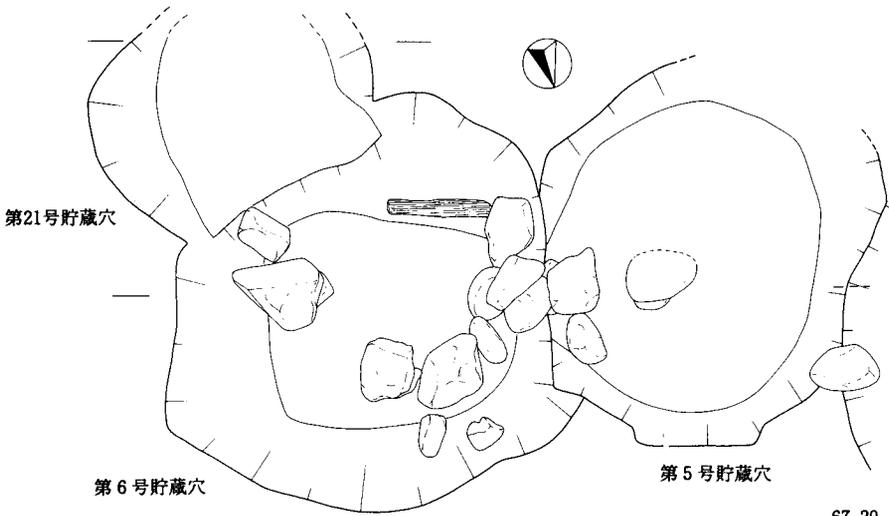
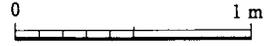


1/30

第10図 貯蔵穴実測図(1)



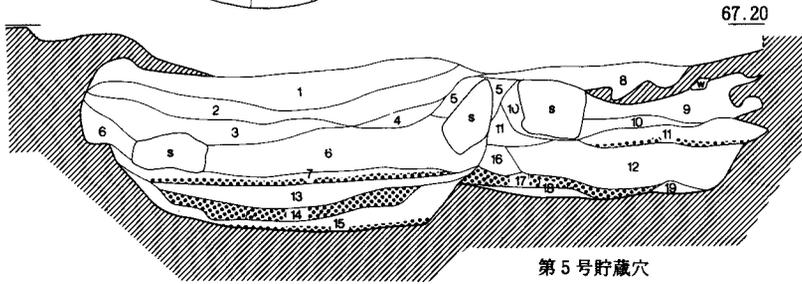
第4号貯蔵穴



第21号貯蔵穴

第6号貯蔵穴

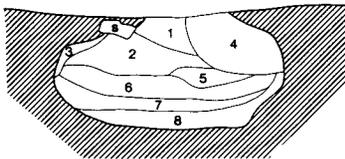
第5号貯蔵穴



第5号貯蔵穴

第6号貯蔵穴

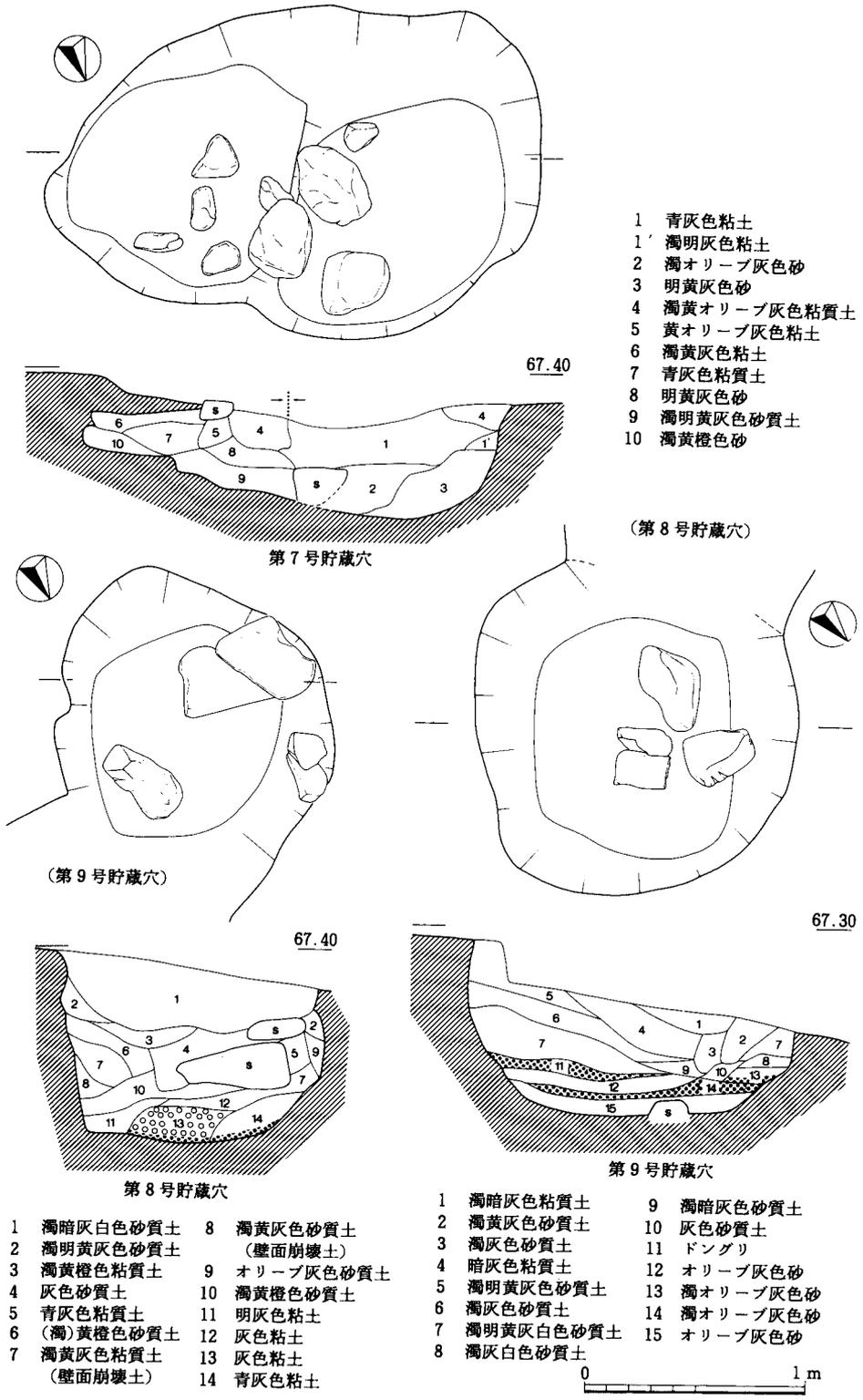
67.40



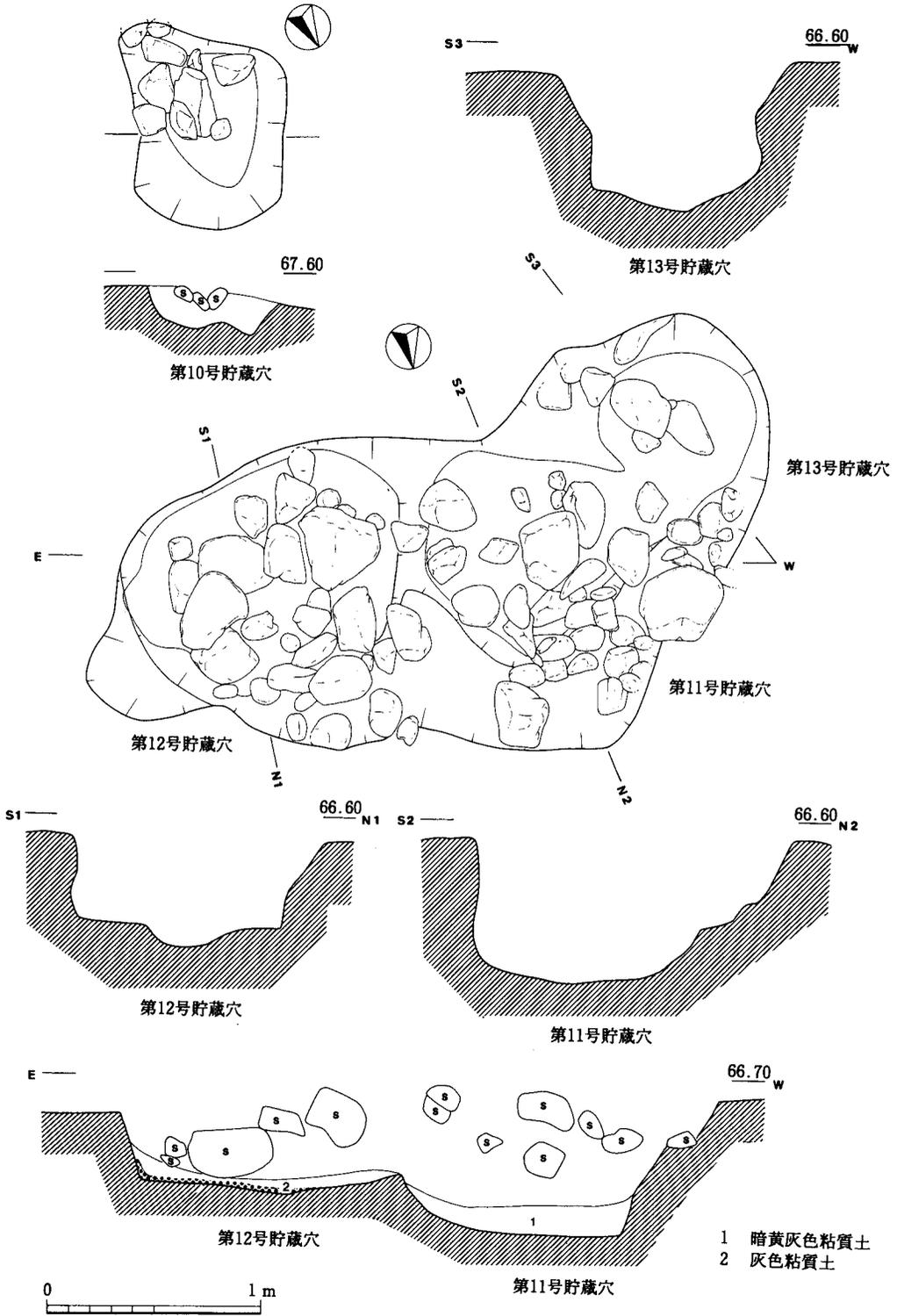
第21号貯蔵穴

- | | | |
|-------------|-------------|-----------|
| 1 灰色粘土 | 1 濁オリブ灰色粘土 | 11 灰色粘土 |
| 2 濁暗黄灰色粘質土 | 2 濁灰色粘土 | 12 灰白色砂 |
| 3 オリブ灰色粘質土 | 3 灰色砂質土 | 13 灰色砂 |
| 4 黄オリブ灰色粘質土 | 4 濁灰色粘土 | 14 濁灰色砂 |
| 5 灰色砂 | 5 濁オリブ灰色粘質土 | 15 濁青灰色砂 |
| 6 灰色粘質土 | 6 濁オリブ灰色砂 | 16 濁灰色砂 |
| 7 明灰色砂 | 7 濁灰色粘質土 | 17 濁灰色砂質土 |
| 8 濁暗青灰色砂質土 | 8 濁黄灰色砂質土 | 18 オリブ灰色砂 |
| | 9 灰色砂質土 | 19 濁灰色砂 |
| | 10 灰オリブ色砂 | |

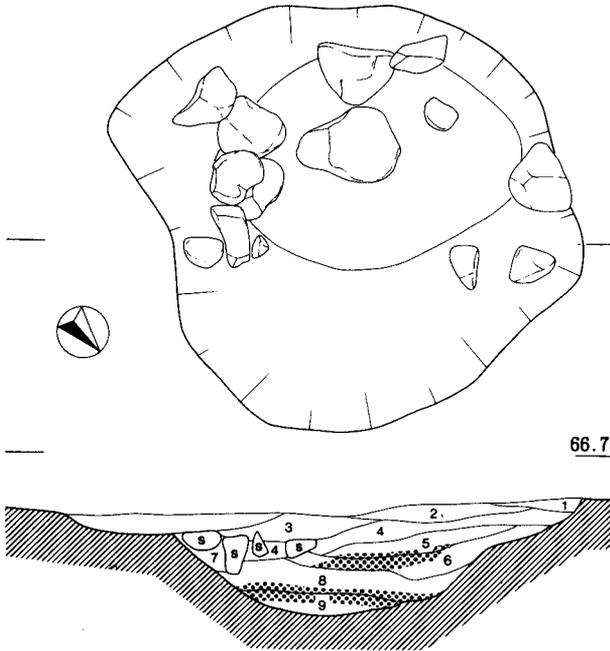
第11図 貯蔵穴実測図(2)



第12図 貯蔵穴実測図(3)



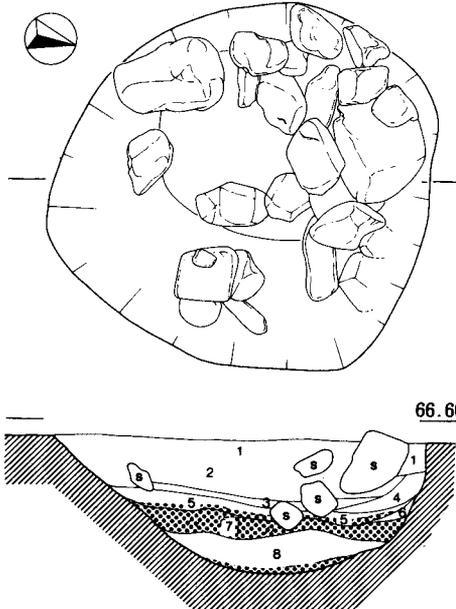
第13図 貯藏穴実測図(4)



66.70

- 1 濁灰褐色粘質土
- 2 濁灰色粘質土
- 3 灰色粘質土
- 4 暗黄灰色砂質土
- 5 明灰色砂
- 6 暗黄灰色砂質土
- 7 暗灰色砂質土
- 8 灰色砂
- 9 暗オリーブ灰色砂質土

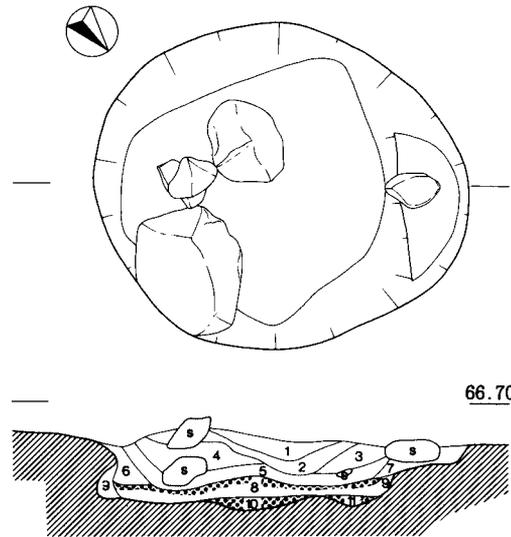
第15号貯蔵穴



66.60

第14号貯蔵穴

- 1 濁灰褐色粘土
- 2 濁灰色粘質土
- 3 濁黄灰色砂
- 4 明灰白色粘土
- 5 濁暗灰褐色粘質土
- 6 暗青灰白色砂
- 7 濁灰色粘質土
- 8 明灰色砂質土



66.70

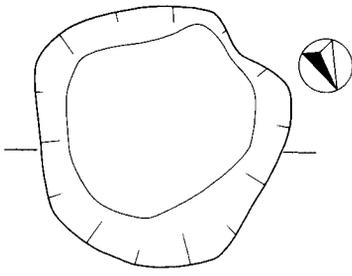
第16号貯蔵穴

- 1 濁黄灰色粘土
- 2 暗灰色粘土
- 3 暗灰褐色粘土
- 4 濁暗灰色粘土
- 5 褐灰色粘質土
- 6 暗灰色粘土
- 7 濁灰白色砂質土
- 8 灰色粘土
- 9 明灰色粘土
- 10 暗オリーブ灰色砂質土
- 11 灰白色砂質土



1/30

第14図 貯蔵穴実測図(5)

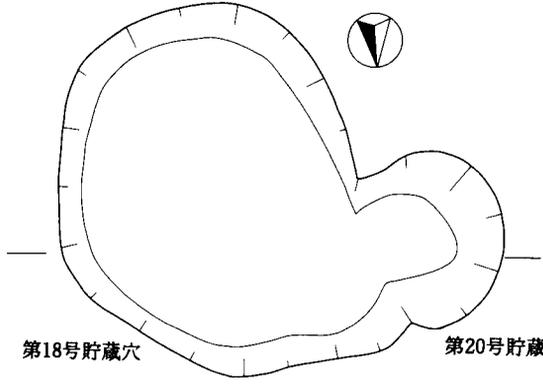


66.70



第17号貯蔵穴

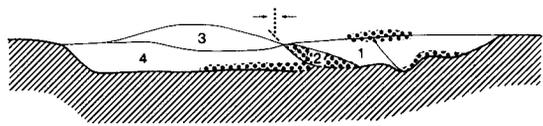
- 1 黄茶色砂質土
- 2 灰白色砂質土



第18号貯蔵穴

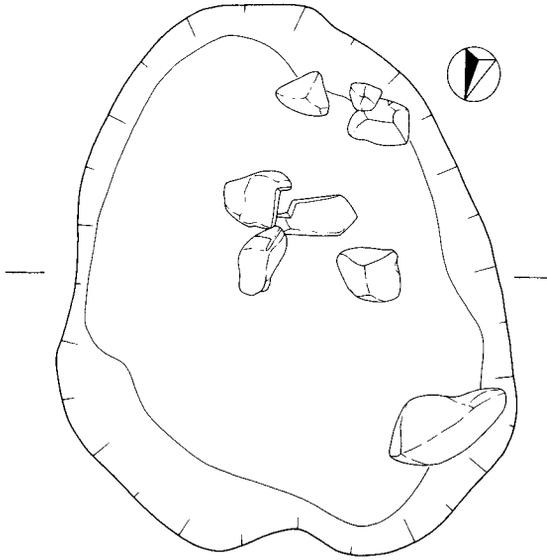
第20号貯蔵穴

66.70

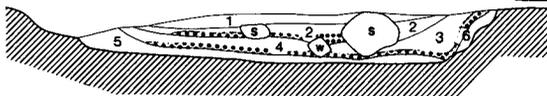


第18・20号貯蔵穴

- 1 灰色砂
- 2 黄茶色砂質土
- 3 灰色砂質土
- 4 青灰色砂



66.60



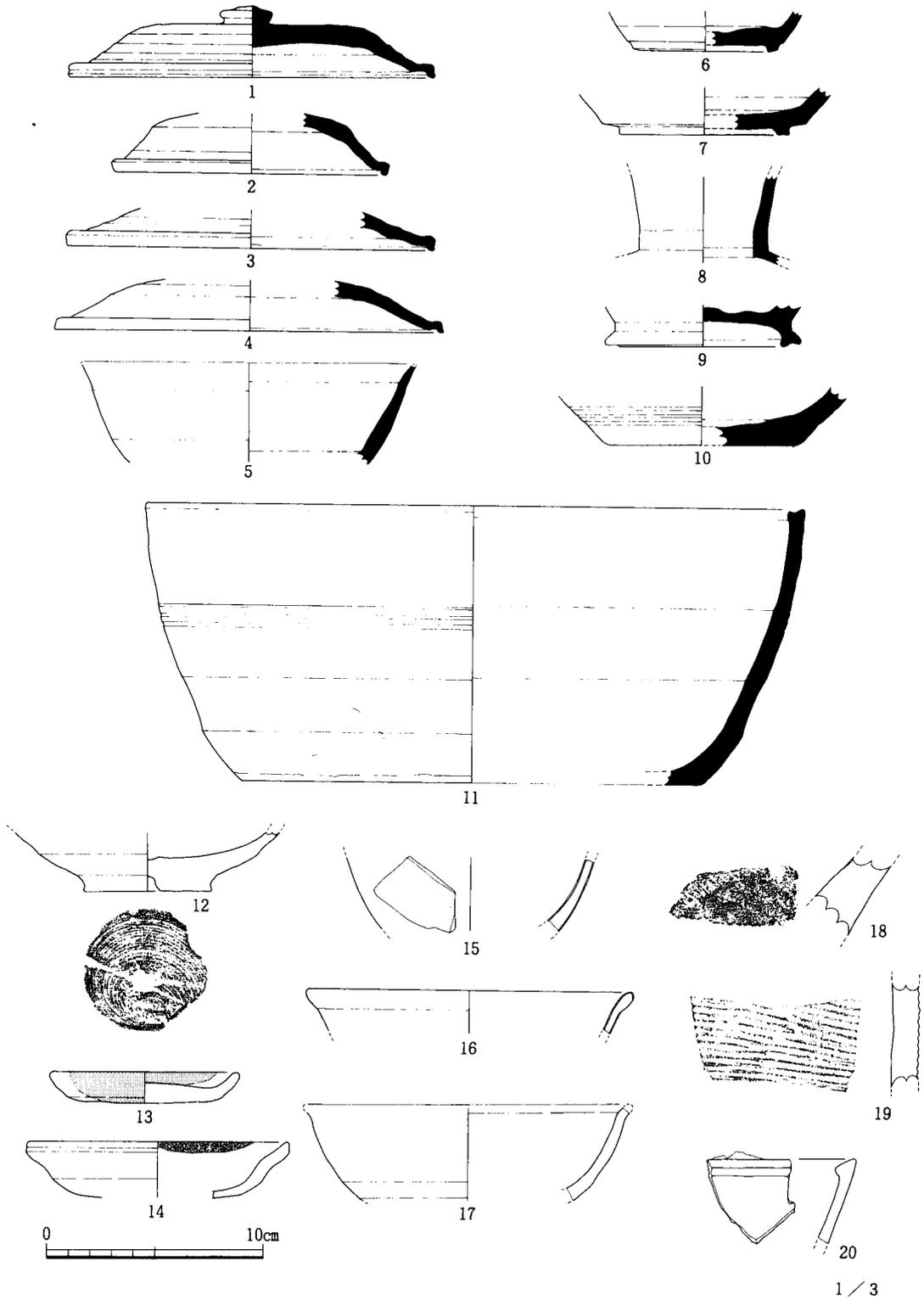
第19号貯蔵穴

- 1 暗灰色粘土
- 2 灰色粘土
- 3 濁青灰色粘質土
- 4 暗灰オリーブ色砂質土
- 5 青灰色砂
- 6 暗灰白色砂質土

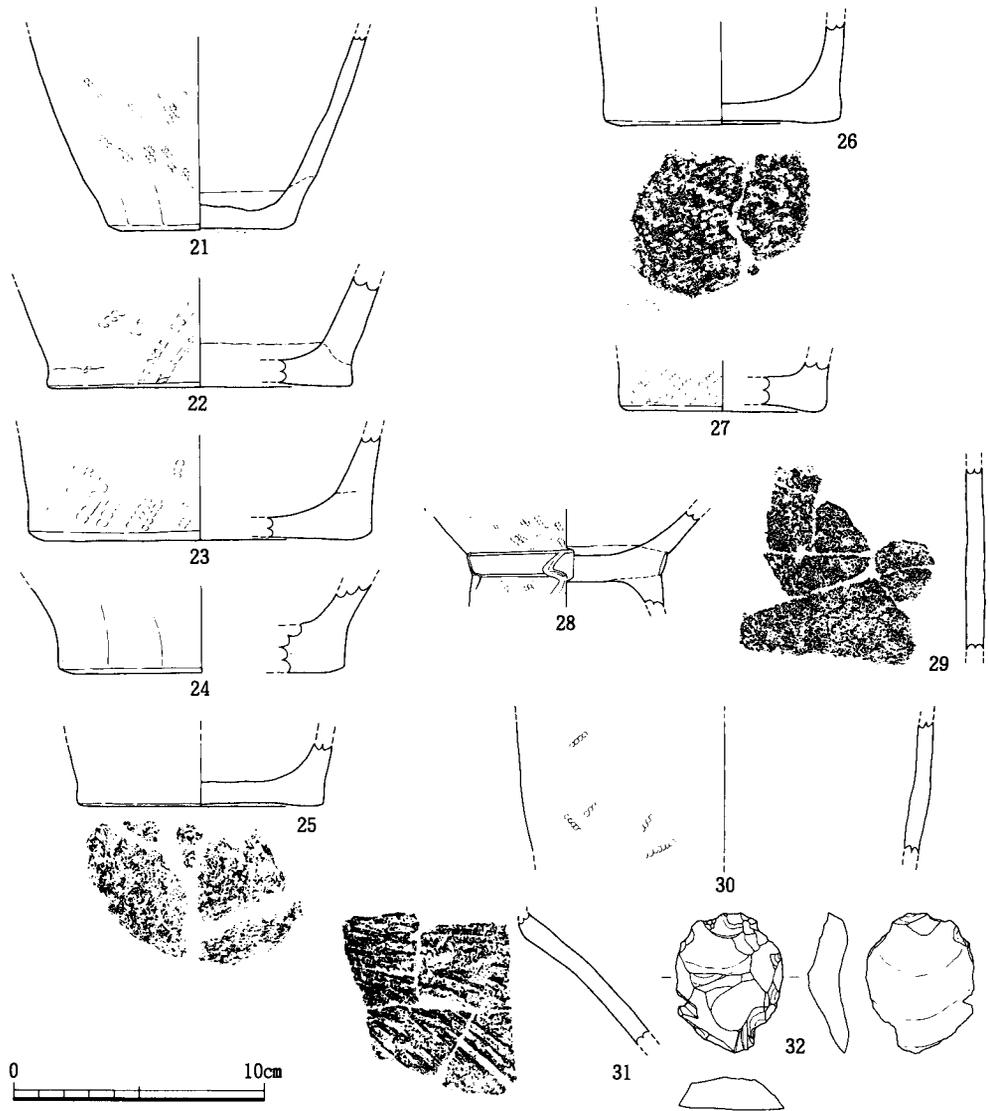


1/30

第15図 貯蔵穴実測図(6)



第16図 A地区出土遺物実測図(1)



第17図 A地区出土遺物実測図(2)

第8号貯蔵穴は、複合する第9号貯蔵穴よりも先行するが、共に袋状形態が窺われる。中層に大礫、下層にトチノキとドングリ類の種子が堆積し、設営期間中の貯蔵物の変化が見られる。第9号貯蔵穴は、下層の2層でドングリ類が検出されている。第10号貯蔵穴は、形態と覆土から貯蔵穴以外の性格も考慮される。

第11号貯蔵穴からは、川側に列なる遺構で、扇状地の礫床を地山として、上面が水田の開削で失われている。第11号貯蔵穴は、第12号と第13号の貯蔵穴と複合し、礫の堆積が多い。各貯蔵穴とも底に薄くドングリ類の付着が見られるだけである。また第14号貯蔵穴から第17号貯蔵穴は、複合も無く単独で位置する。ドングリ類の堆積は、第14号は3層、第15号が4層、第16号が2層

である。第17号貯蔵穴は、第8号と同様にドングリ類からトチノキへと貯蔵物が変化している。

第18号貯蔵穴は、後出の第20号貯蔵穴と複合する。いずれも下層部分だけで、ドングリ類の堆積は、第18号が2層、第20号は1層みられた。第19号貯蔵穴も下層部分だけであるが、2層のドングリ類の堆積がみられた。

このように貯蔵穴の下層部から検出されたドングリ類やトチノキの種子は、かつて各貯蔵穴に大量保存されていた種子の残片で、その包含層の堆積数は、貯蔵穴の利用回数と理解される。それはドングリ類等の包含層が、貯蔵穴の下層に2層以上の堆積が確認される場合、種子や異物を含まない灰色砂層の間層が、水成堆積した様子が観察されるからである。

たぶん貯蔵穴へ収納されたドングリ類は、籠などの容器に入ることも無く、貯蔵穴へ直接投入されたと考えられる。間層が堆積した期間は、貯蔵穴の休止期間で、上部には覆い蓋などが掛けられ、異物の流れ込みが無い状態にあったと推測される。

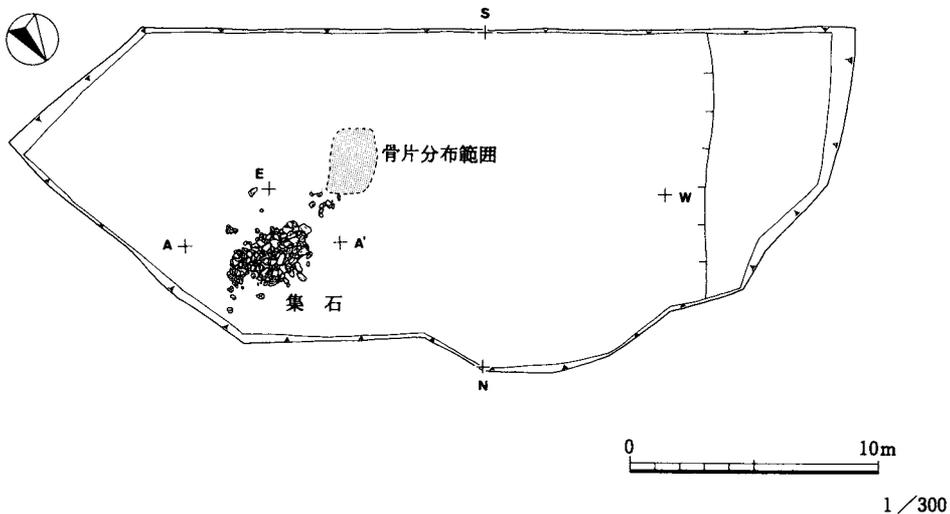
このA地区西部の貯蔵穴群が設営された時期は、出土土器と理化学的な分析（第4節参照）から、縄文時代後期末から晩期前葉と推定される。各貯蔵穴の複合も関係するが、同時期に使用された貯蔵穴は、3・4基程と考えられる。

(2) 出土遺物 貯蔵穴とその周囲から出土した遺物は、縄文土器約20点、石器1点と少なく、第17図の遺物は、主に貯蔵穴から出土した土器や石器である。

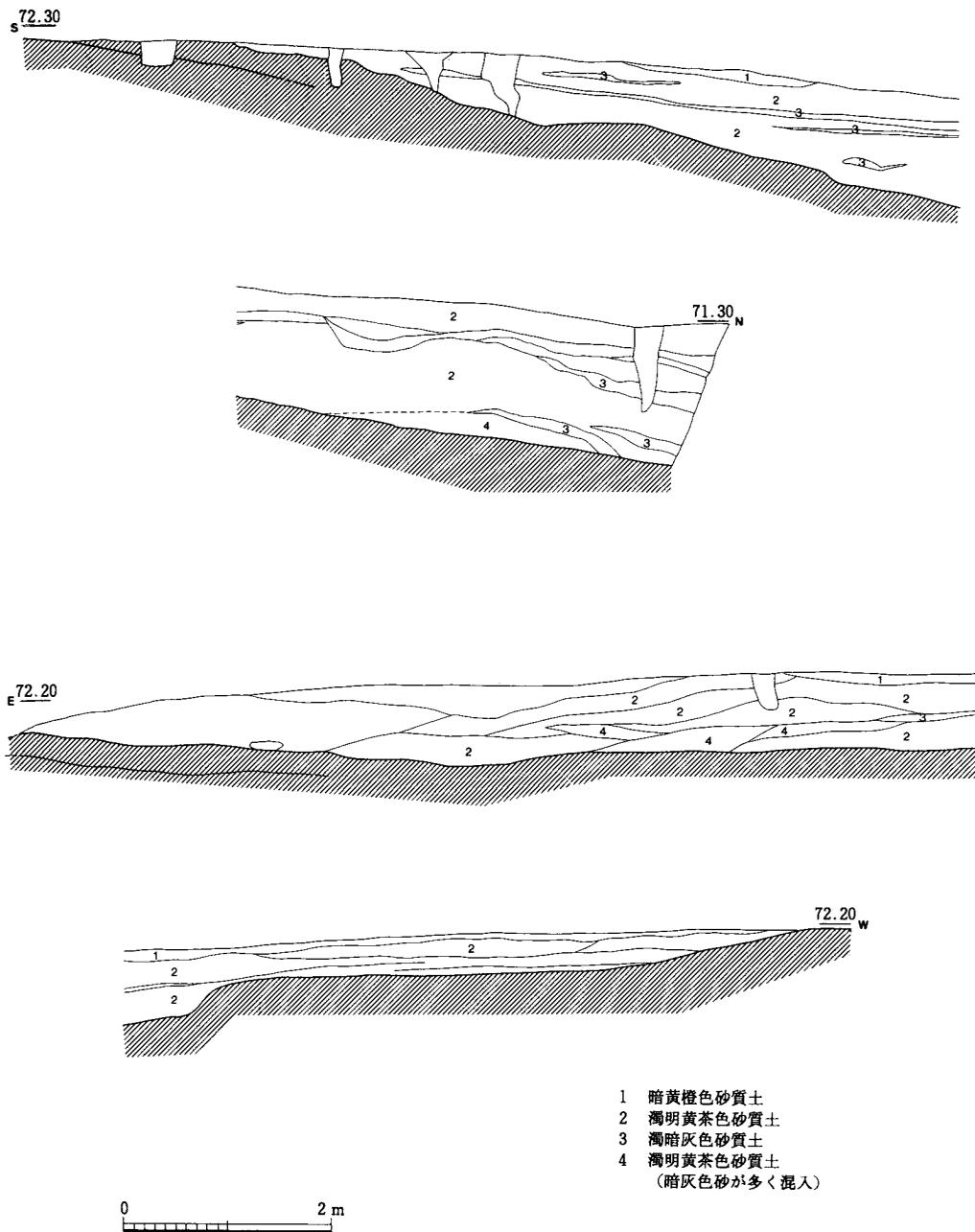
21～27は、深鉢の底部である。21は第3号貯蔵穴出土の中型の深鉢で、胎土はにぶい橙色を呈する。22・23・26・27の4点は、第4号貯蔵穴の上層から出土で、底径から大型と中型の2製品が知られる。22・23は、胎土が粗く灰黄色を呈する。26・27の胎土は、比較的に密で黄橙色を呈する。23は第11号貯蔵穴からの出土である。胎土は砂粒の混入が多く、にぶい橙色を呈する。

28は第2号貯蔵穴から出土した台付鉢で、S字文様から加曾利B式平行期とみられる。胎土はにぶい橙色を呈し、砂粒の混入が少ない。29は第9号貯蔵穴から出土した粗製の深鉢である。

その他の土器や石器は、包含層からの出土品である。



第18図 B地区全体図



第19図 B地区整地土層断面実測図

第3節 B地区の遺構と遺物

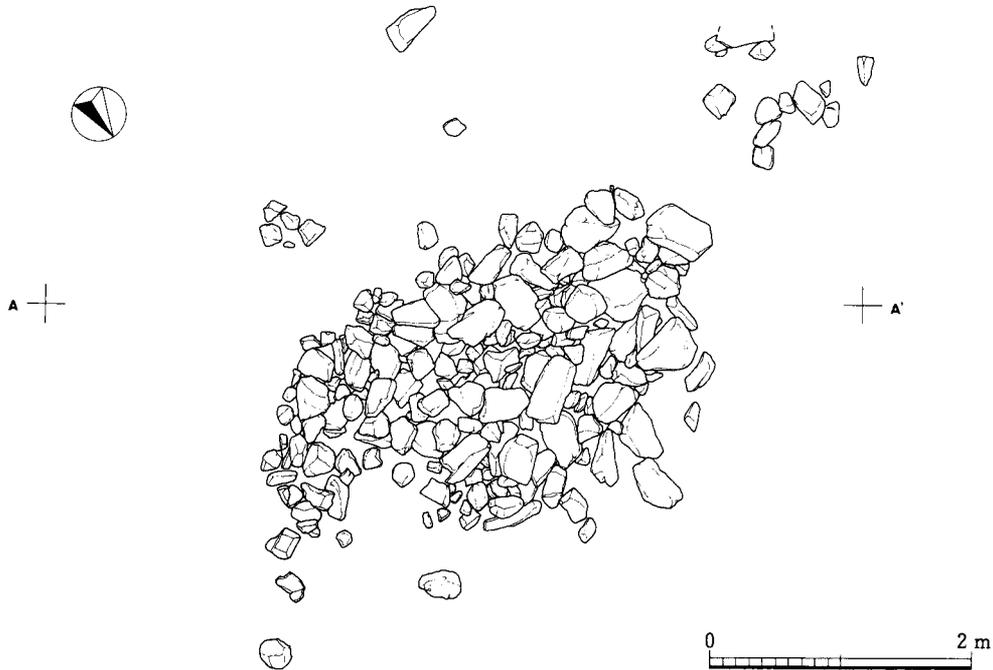
1. 遺構と土層（第18図～第20図 図版第11）

B地区の調査区は、開析丘陵の北側斜面の谷部に位置する標高72mの平坦地である。A地区の調査中に実施したトレンチ調査で、平安時代後半の土器が出土したことから、古代の造成地と推定し、平成元年11月上旬から、A地区西部と並行して発掘調査を進めた。調査区の規模は、東西35m、南北14mを測り、前面のA地区とは、約5mの比高がある。またこの平坦地は南の谷間にも広がり、調査区の約倍の面積が想定される場所である。

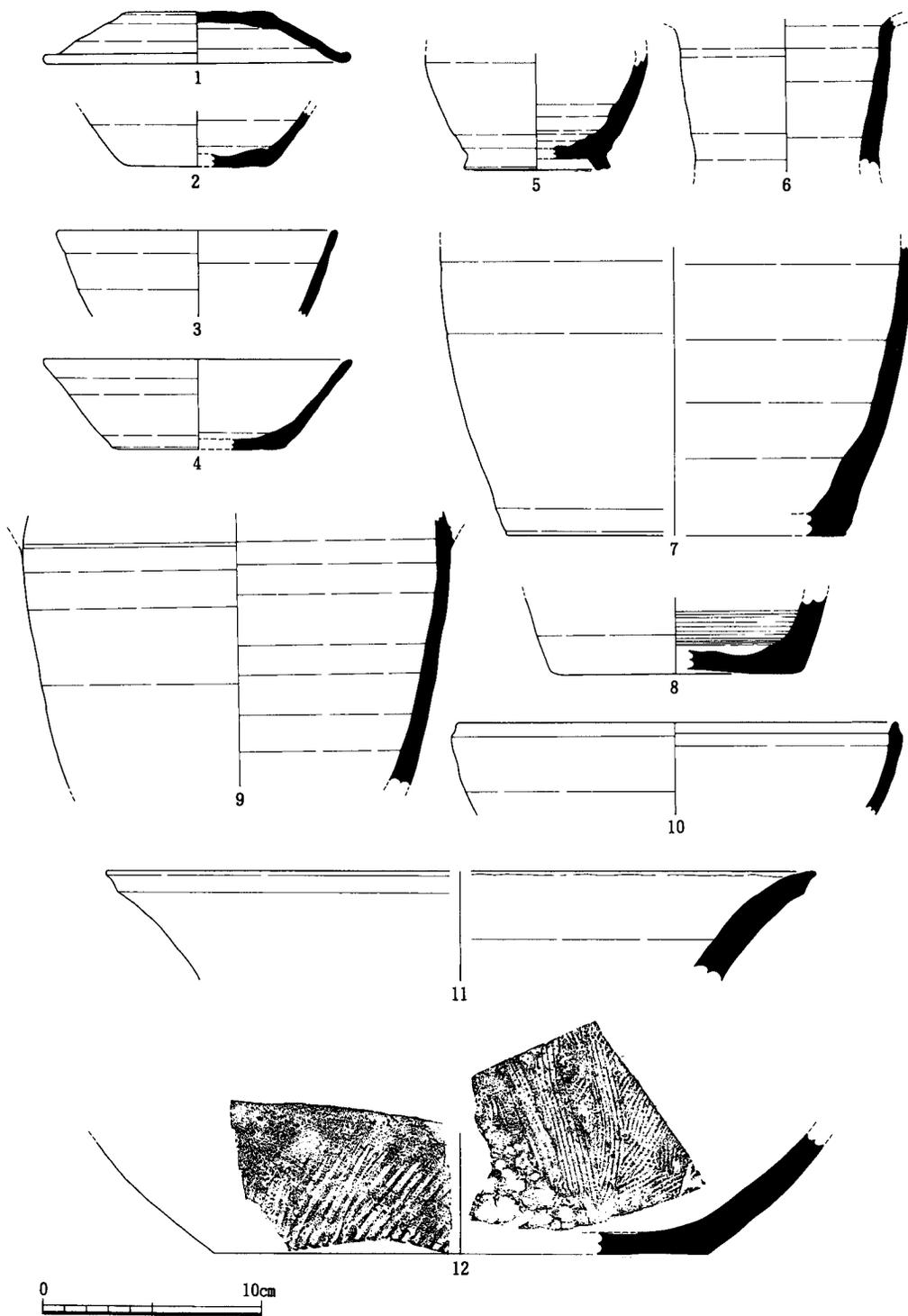
調査区の西部から南側にかけては、平安時代後半の土器が多く出土したが、明確な遺構は確認されず、中央近くで火葬骨片の散布、東部で室町時代頃の集石遺構を検出しにとどまる。しかし造成された平坦地では、開削された黄茶色砂質土の地山土が、最大1.5mも盛土されていること事実から、室町時代以前にかなり大規模な造成が知られるが、その性格を火葬骨の散布や集石遺構の構築をもって、中世の茶毘所とは説明しきれない内容である。

2. 出土遺物（第21図・第22図 図版第12）

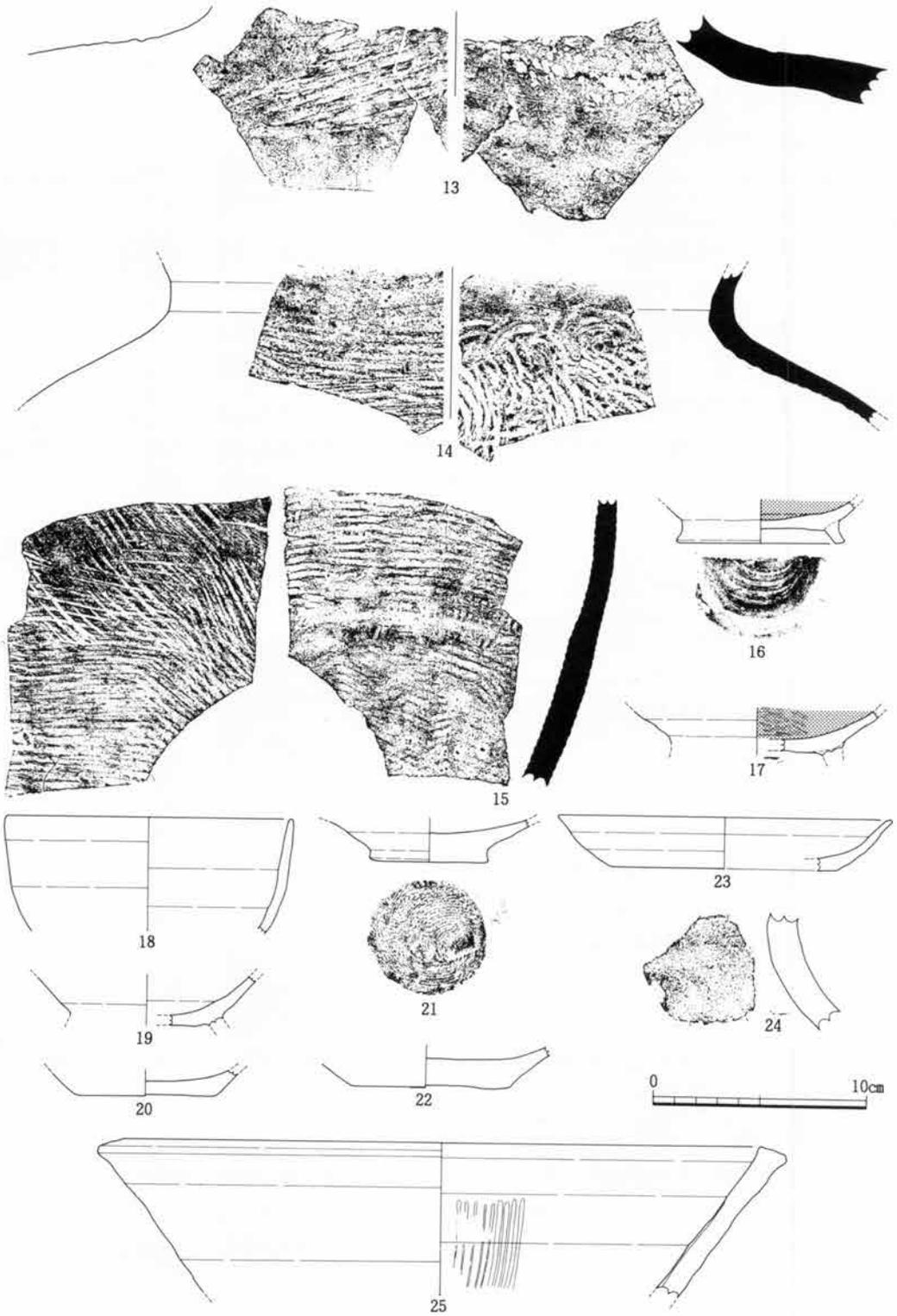
B地区の平坦地からは、平安時代の須恵器や土師器、室町時代の陶器類が出土した。1～10は須恵器の坏、坏蓋、瓶類、鉄鉢で、10世紀前半の製品とみられる。また11～13の須恵器の甕は、18～22の土師器の碗と共存する可能性が高い。24と25は共に集石遺構からの出土である。24は越前焼の甕で、25は珠洲焼の插鉢である。



第20図 B地区集石実測図



第21图 B地区出土遺物実測図(1)



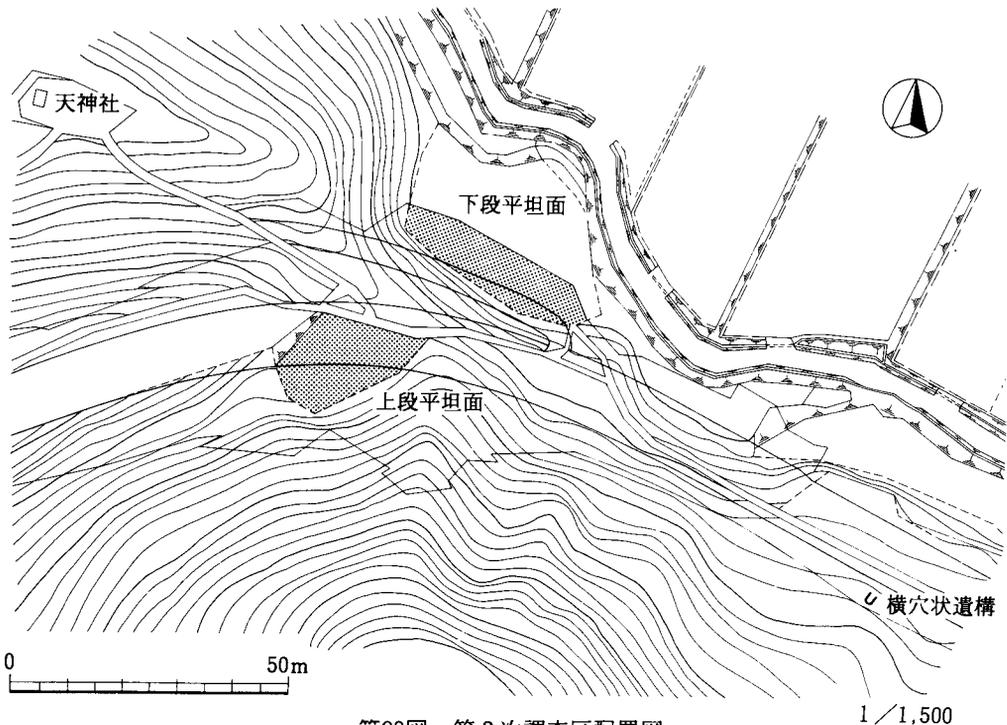
第22図 B地区出土遺物実測図(2)

第5章 第2次調査の遺構と遺物

第1節 概要

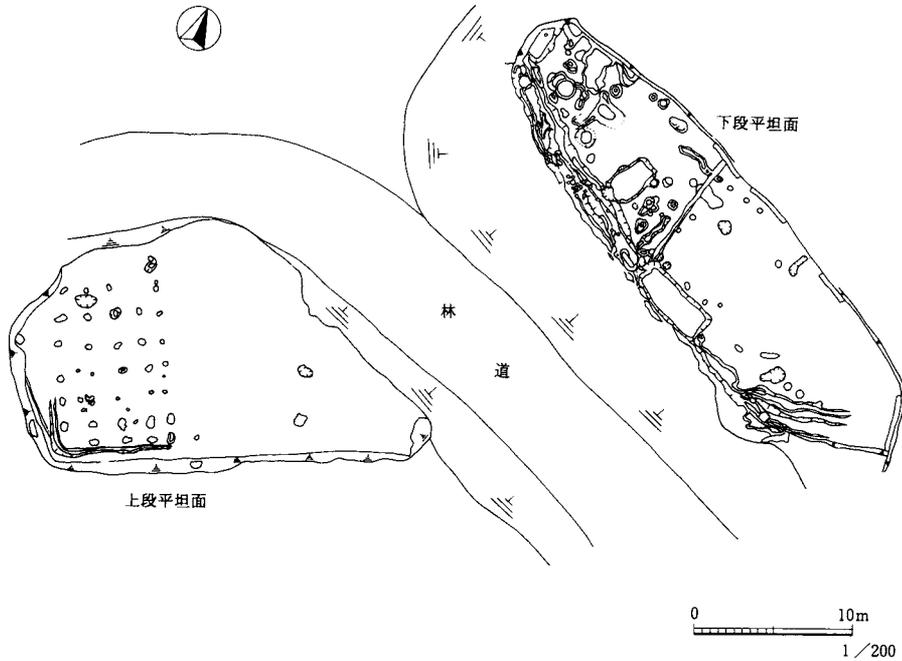
本遺跡の第2次調査は、前年度からの継続調査として平成2年度に実施した。調査箇所は第1次調査区の西方に位置する上下二段の平坦面で、上段平坦面は「テンジンヤマ」の鞍部で、下段平坦面は「ダイラクボウ」と呼称される山林の小字地である。さらに同町正友地内にある正友ヤチャマ窯跡も本遺跡と同じ農免農道の路線中に位置することから、平成2年度の本遺跡の第2次調査に引き続き、正友ヤチャマ窯跡の調査を実施する調査計画が生まれ、両遺跡の発掘調査は同一事業として進められた。そのために両遺跡の調査期間は、約一ヵ月ほど複合した。

本遺跡の第2次調査は、平成2年6月11日に現地調査を開始し、同年8月11日に作業を完了している。調査区が丘陵の鞍部に位置する上下二段の平坦面であることから、調査は上段平坦面から作業を開始して、7月5日には遺構調査が終え、作業員を下段平坦面へ投入した。しかしこの下段平坦面は、四方が丘陵斜面と杉林で囲まれ、その現場環境は「茶碗の底」と例えられる状況であった。周囲からの風はその全てが遮断され、日中の気温が異常に上昇するという悪条件の場所であった。下段平坦面での発掘作業の効率が悪く、遺構の調査は予定よりも遅れ7月27日にその作業を終え、7月30日からは下段平坦地の実測作業を残して、作業員を正友ヤチャマ窯跡の現場へと移動し、須恵器窯跡の検出作業に着手した。



第23図 第2次調査区配置図

1/1,500



第24図 第2次調査区全体図

この紺屋町ダイラクボウ遺跡の第2次調査の面積は、上段平坦面が約330㎡、下段平坦面が斜面を含め約370㎡を測る。合計の調査面積は700㎡である。

調査により上段平坦面は標高71mの丘陵鞍部に位置するが、南西から南方向側の斜面裾を切落とし、黄橙色の砂質土を北の鞍部方向を埋立することで、広く造成された平坦面であることが判明した。その上段平坦面の西寄りの場所からは、東面する1棟の礎石立建物跡を検出したが、それ以外は広場的な空閑地が広がる。建物遺構はこの1棟だけで、あとは周囲で検出された土坑が3基あるだけと数少ない。なお南西側の法面は、平坦地から2m前後の高さをもって切り落されるが、法面の裾は直線的に整えられている。

調査した上段平坦面の平面形は、不整形な五角形態を呈していたが、これは平坦面の北側に開設された作業林道で、広場的な空閑地の北東側が切り落とされた結果とみられた。かつては略長方形に近い敷地形態であったと判断される。さらに検出した建物跡は、その形態と伝承を考え併せると、上段平坦面の西方の建つ天神社の旧社殿跡と判断される遺構である。

また下段平坦面は標高64mで、上段平坦面とは約7mの比高を測る場所で、調査範囲はこの下段平坦面の南側約三分の一を占める。この平坦面も南側上方の斜面を切り落とし、北側下方の斜面を埋立てた約900㎡の造成地で、調査範囲からは、掘立柱建物の柱穴跡、井戸跡、水溜め遺構、土坑など、中世集落遺跡と同種の遺構を検出した。その内容と構成からしても、この下段平坦面は、居宅的な性格が強く、地元で伝承される「ダイラクボウ」と関連が注目された屋敷跡である。

第2節 上段平坦面の遺構と遺物

1. 遺 構

上段平坦面で検出した遺構は、礎石立建物の社殿跡1棟、土坑3基、溝跡1条と広場的な空閑地と数少ない。社殿跡と判断された礎石立建物は、平坦面の西側に寄りに構築され、東面する建物でその一角に排水溝が開削されている。3基の土坑は社殿跡の右横と後方、さらに広場的な空閑地の東と点在する。

(1) 礎石立建物（第25図・第27図 図版第14）

上段平坦面の西側に構築されていた建物跡で、天神社の旧社殿跡と判断される遺構である。桁行4間、梁行3間の母屋に、南北両面と東面に庇が付く構造で、桁行は6.6m、梁行5.2mを測る。庇の柱間寸法は、母屋と同一であるが、庇幅は1.2mを測る。

礎石は径40～82cmの川原石を据え置いた簡素な造りで、根石などの埋め込みも認められない。石質は花崗岩や安山岩で、その質感して遺跡の北を流れる前田川の川原石が利用された可能性が高い。さらに母屋の礎石の20個中13個、庇の礎石の13個中11個が抜き取られていたことで、桁行・梁行の寸法には不確定の要素がある。なお礎石の抜き取り穴は、表土と同質の腐葉土が堆積し、北辺の穴からは唐津の播鉢（第29図5）が出土している。

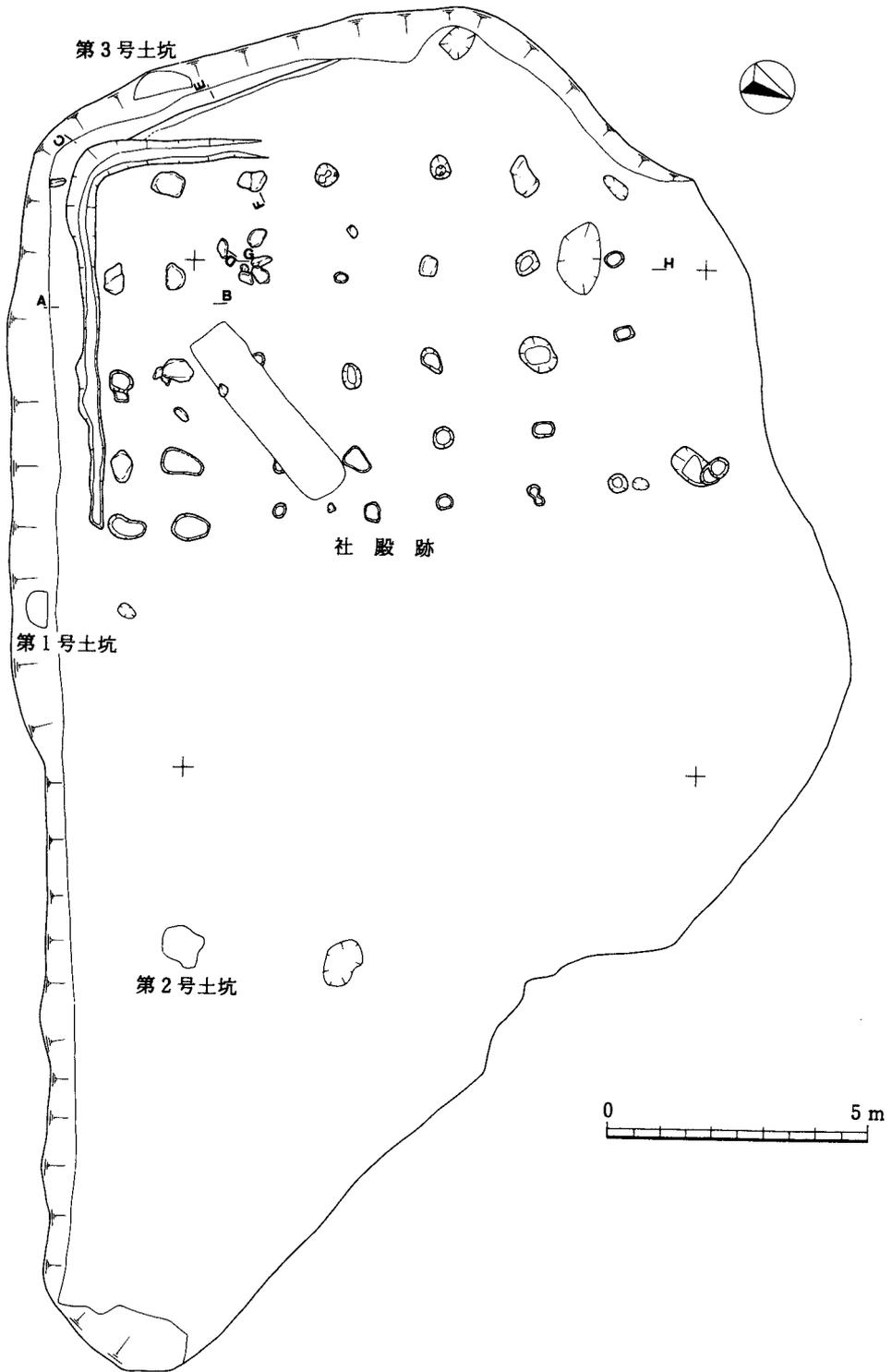
(2) 土 坑（第28図 図版第15・16）

第1号土坑 上段平坦面の南東側斜面で、社殿跡の前面左手に位置する。土坑の底は平坦面から40cmの高さにあって、平面が三角形を呈する。土坑の間口幅96cm、奥行51cmを測り、断面が袋状を呈していたとみられる。

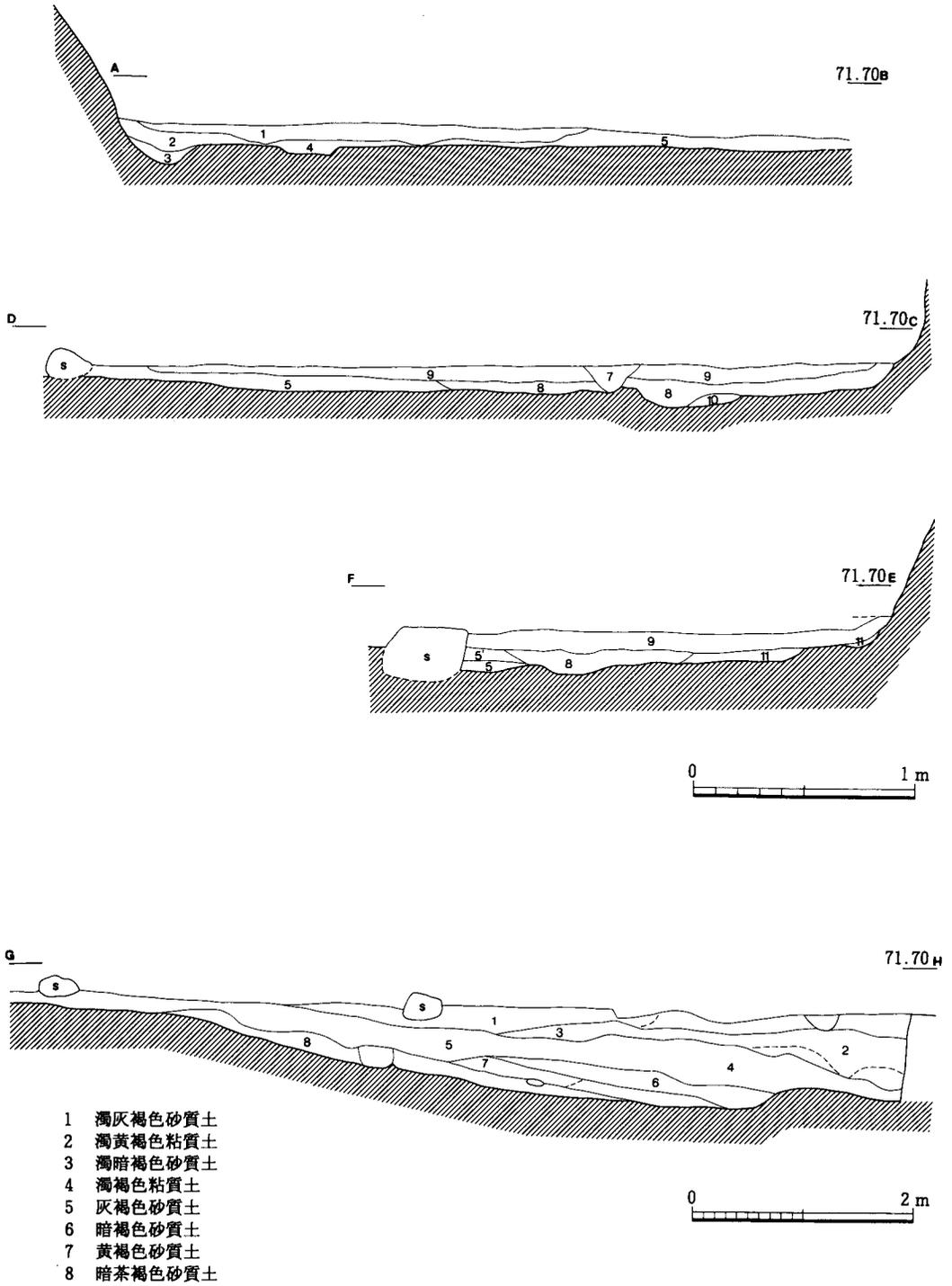
この土坑は当初から平坦面側に大きく開口した遺構である。底の直上に堆積した暗茶褐色粘質土には炭化物を含むが、それ以外の堆積土層は、上方から崩落した地山土で、遺物の出土も確認されなかった。土坑の前面は調査時にその一部を欠損しているが、土層の堆積状況からすると、本遺構の開削は平坦面の造成後であろう。

第2号土坑 広場的な空閑地の東に単独で位置する。平面形は円形に近く、上場短径67cm、長径90cmを測る。断面形は逆台形で、深さは44cmを測る。堆積土層は主に南の斜面方向から流入した地山土である。

第3号土坑 礎石立建物の左背後の斜面に位置する。土坑の底は平坦面より26cmの高さにあって、平面が略長方形を呈するが、その北半部に内部が焼け、火処として使用された土坑が複合する。土坑の底は間口幅126cm、奥行70cmを測り、土坑北半部の火処の部分は、幅75cm、奥行66cm、深さ20cmほどである。またこの複合した土坑の底は焼土化し、内部には炭化した米の塊が、大小11ブロックも出土したが、これは本遺構が火処として使用され時に、その火中へ投入された米が、その余熱で炭化したもので、この土坑が特異な火処であったことを強く意味している。さらに土坑上に堆積した土層断面をみると、奥壁はかつては袋状形態に掘り込まれ、第1号土坑と形態や規模が類似している。

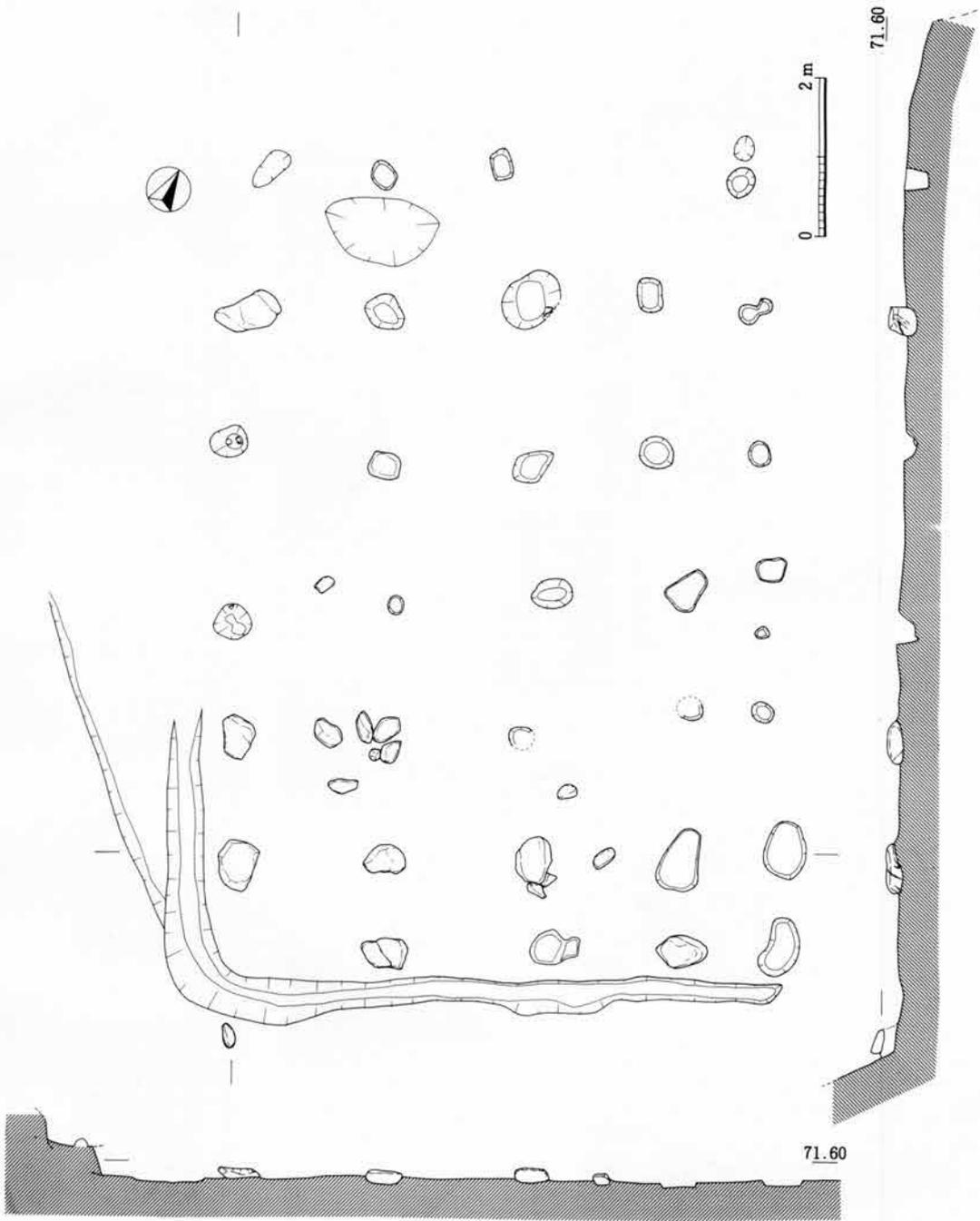


第25図 上段平坦面実測図

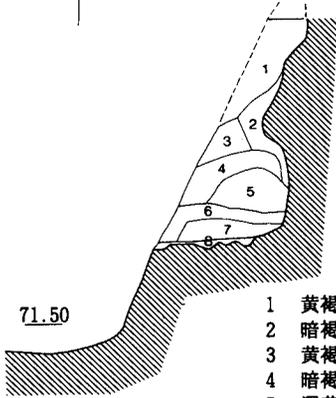
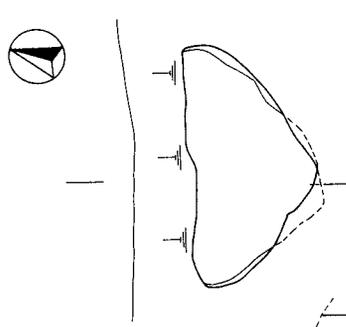


1/30, 1/60

第26図 上段土層断面実測図

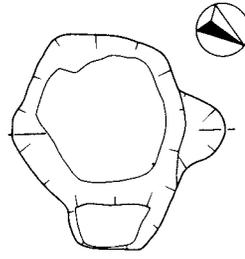


第27図 社殿跡実測図

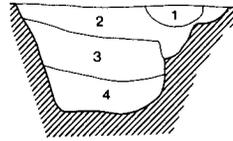


第1号土坑

- 1 黄褐色粘质土
- 2 暗褐色砂质土
- 3 黄褐色砂质土
- 4 暗褐色砂质土
- 5 褐黄褐色砂质土
- 6 暗黄褐色砂质土
- 7 褐暗褐色砂质土
- 8 暗茶褐色粘质土

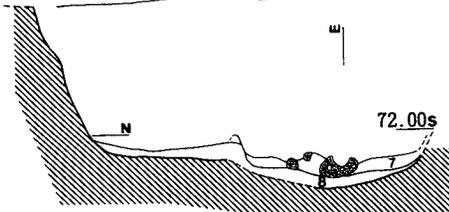
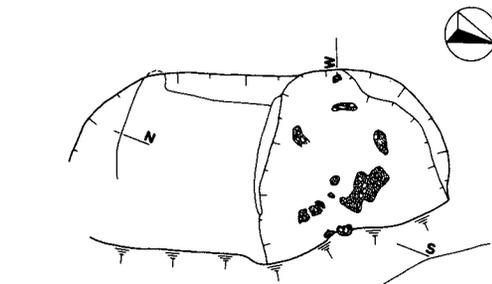


71.80

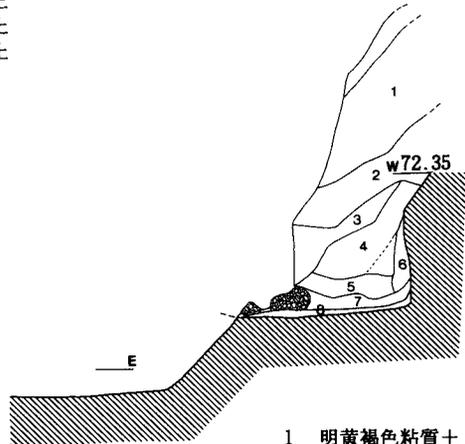


第2号土坑

- 1 黄褐色粘质土
- 2 褐黄褐色砂质土
- 3 暗褐色砂质土
- 4 灰褐色粘质土



第3号土坑



- 1 明黄褐色粘质土
- 2 淡黄褐色粘质土
- 3 淡黄褐色粘质土
- 4 淡黄褐色粘质土
- 5 明黄褐色粘质土
- 6 明黄褐色粘质土
- 7 暗黄褐色粘质土
- 8 暗褐色土



第28图 上段平坦面土坑实测图

(3) 溝 (第26図・第27図)

礎石立建物の後方角から南辺にかけて、L字形に走る小溝である。溝幅は26～48cmを測るが、直角に折れる部分で幅64cmに広がる。深さは5cm前後と浅く、暗茶褐色砂質土から濁褐色粘質土の堆積がみられた。その位置と規模からして、南側斜面から礎石立建物へと流下する降雨などを遮断することが、その開削目的と推定される遺構である。

(4) 空閑地 (第25図・第26図)

上段平坦面の東側の約五分の三は、第2号土坑と浅い窪みを除くと無遺構の場所で、広場的な空閑地である。規模は東西15.4m、南北15.3mを測り、現在の平面形は三角形を呈するが、その北東部が作業林道で切り落とされたことを考慮すると、元は略方形的、もしくは略台形を呈した造成地と推定される。その南半分は地山を削平した部分で、北半分は斜面上方から切り落とした砂質土の造成地である。

空閑地の標高は南側で71.6m、北側で71.1mを測り、北に緩やかに傾斜する。これは平坦地を造成した場所が、丘陵の北斜面であることを反映したもので、平坦地の土層の断面観察からも判断することができる。

2. 遺物 (第29図 図版第20)

上段平坦地からの出土遺物は、土師質土器、瀬戸・美濃、越前焼、唐津、磁器などの土器・陶磁器類と、火打ち石、鉄釘が確認されたが、その点数は少ない。

1・2は土師質の小皿で、1の口縁部には灯芯油痕が強く付着する。3は瀬戸・美濃の灰釉皿で、1の小皿と共に空閑地の北東隅から出土した。また4の越前焼の挿鉢は、口径30.6cm、卸目幅2.9cmの11本で、器面は浅黄橙色を呈する軟質の製品である。空閑地の北東隅でも斜面部からの出土である。1～4の遺物は、いずれも16世紀前半代の遺物群である。

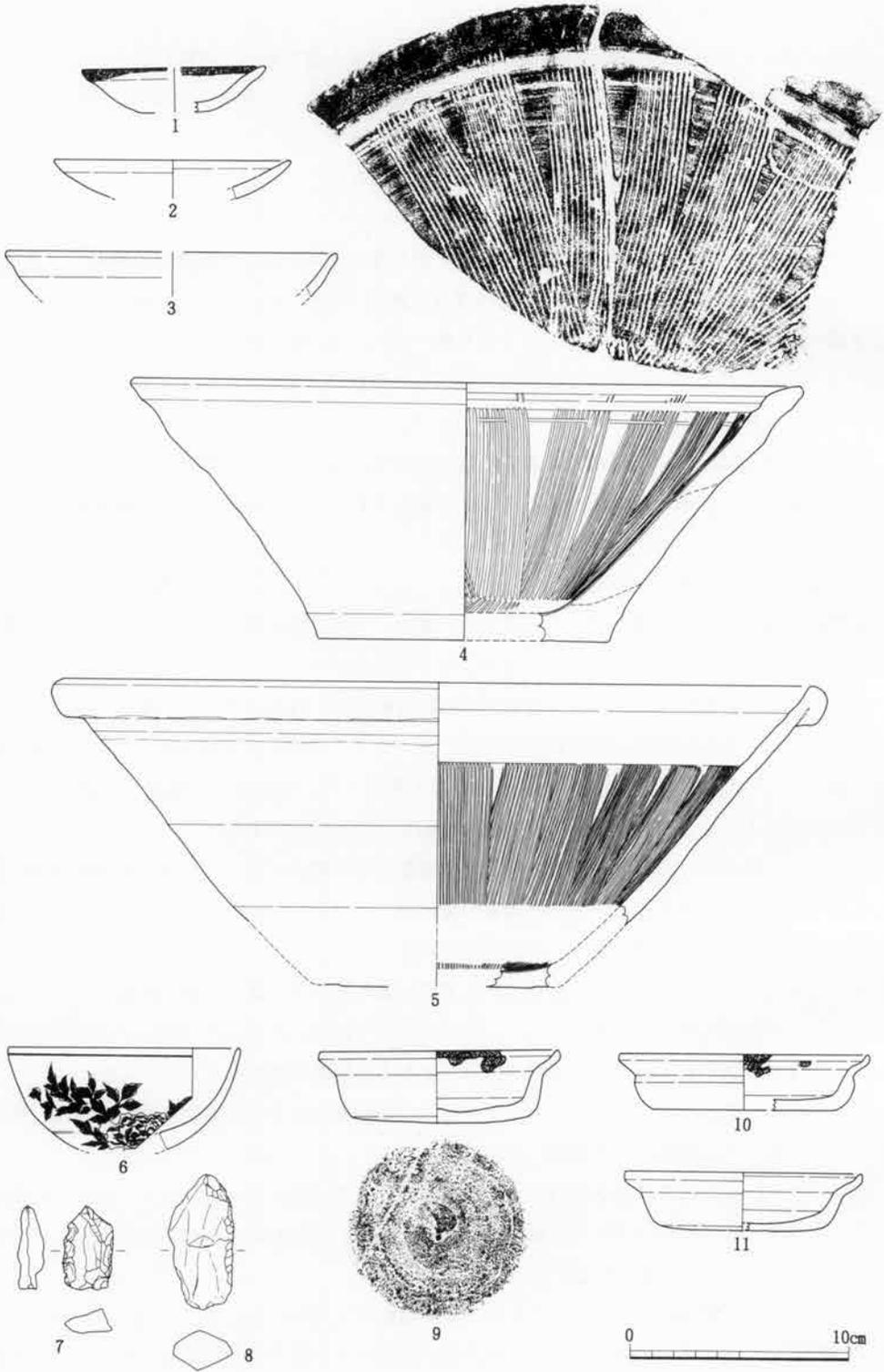
5は唐津の挿鉢で、口径33.8cmを計り、暗赤褐色のアメ釉が外面にかかる。社殿跡北側の礎石の抜取り穴からの出土である。6は磁器質の染付碗で、口径10.4cmを計る。器面の牡丹絵は銅版転写である。5・6とも19世紀末頃の製品であろう。

7は珪質頁岩の剝片石器で、左側面に粗い刃部が認められる。縄文土器の細片も出土していることから、当該期の石器の可能性が高い。8は石英の小礫で、右側面に打撃による剝離痕が認められ、石質と形状から火打ち石と判断される。また1寸前後の鉄釘も3点出土した。

9～11の須恵器の坏は、天神山でもオオササワラと呼称される丘陵斜面の横穴状遺構(第23図参照)で採集された遺物で、本遺跡の参考資料として、ここに掲載するものである。

3点の坏は口縁部を受け口状に外折させた須恵器の坏で、底はヘラ切り離しである。各製品は口径11～12cm、底径8.2～8.6cmの法量で近似する。またいずれも器面が被熱で軟質化し、口縁に灯芯油痕が認められ、共通の使用が知られる。

この種の坏の出土事例としては、本町の宿向山遺跡や金沢市の三小牛ハバ遺跡からの出土土器にその類品を見いだすことができる。古代でも9世紀代に生産された須恵器であるが、その器形と使用痕からしても特異な容器と推定される遺物である。



第29図 上段平坦面出土遺物実測図

第3節 下段平坦面の遺構と遺物

1. 遺 構

下段平坦面で検出した遺構は、井戸2基、土坑8基、溝4条、溝状遺構4条、ピット28穴などで、その多くは調査範囲の西部に集中し、東部には少ない状況がみられた。これは東部の無遺構の部分が、広場的な空地として機能した結果と推定される。またピットの一部には、掘立柱建物の柱穴と認定可能な遺構も検出されたが、建物の規模や構造までは確認されていない。

それは下段平坦面の調査範囲が、平坦面の敷地の約三分の一と限られた場所であると同時に、面積約370㎡と狭小であることに大きく関係するようである。下段平坦地は標高64.5mを測り、上段平坦地とは約7mの高差を測る造成地であるが、その造成規模は上段平坦面よりも大きい。全体としては地元に伝承される「ダイラクボウ」に関係した屋敷地と推定されるが、調査範囲の制限から、その全体像の把握までは至っていない。

(1) 井 戸 (第30図・第31図 図版第18)

第1号井戸 調査区の西部に位置する井戸跡である。平面形は円形で、西側に掘り方状の窪みが付く以外は、内部形態は円筒形を呈する。規模は東西径138cm、南北径124cm、深さ350cmを測る。湧水も無く井戸の底まで調査できたが、井戸枠の検出や遺物の出土は無い。しかし本井戸の内部形態と堆積土層の様子からすると、井戸の内部には曲物などの井戸側が設置されていた可能性が高い。

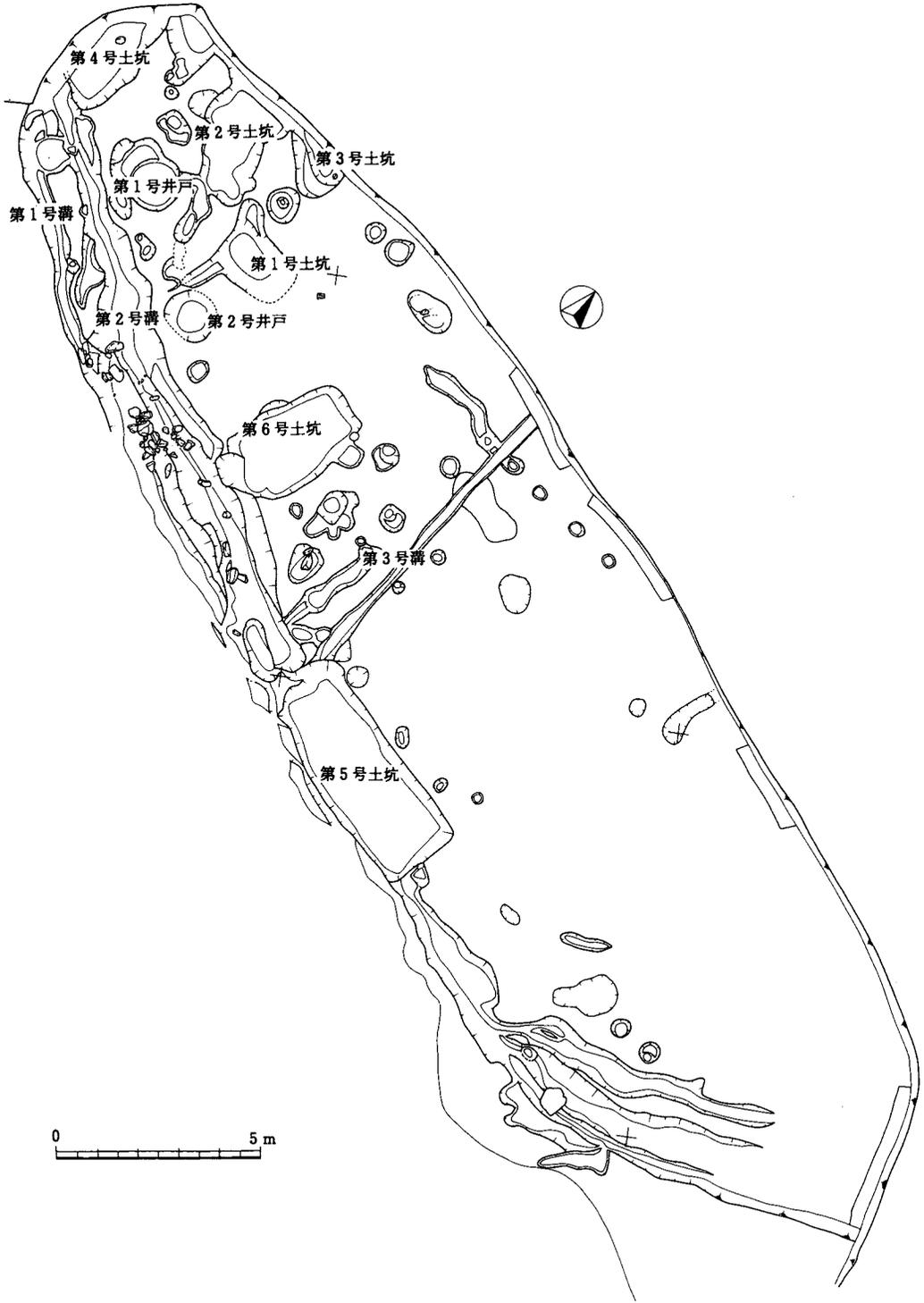
第2号井戸 調査区の西部でも、第1号井戸に近くに位置する。平面形はやや歪むが円形に近く、内部形態は円筒形を呈する。規模は東西径150cm、南北径120cmを測るが、深さについては約370cmと判断される。それは井戸の調査中に起きた湧水で、内部の土層が崩壊し、底部の調査を断念したからである。崩壊した土層と内部形態からすると、本井戸には井戸側などの内部施設は無く、素堀りの井戸として使用されていたと推定される。また井戸底近くの堆積土からは、蓮の実が一個出土した。

(2) 土 坑 (第31図・第32図 図版第19・20)

第1号土坑 調査区の西部に位置して、第2号井戸と近接する。平面形は東側が不明瞭ながらも、隅丸の長方形を呈し、その西側に溝状遺構が付設する。規模は東西径約200cm、南北径142cm、深さ35cmを測り、底は舟底形態に近い。覆土は濁茶褐色粘質土の単一層である。

第2号土坑 調査区の西部に位置する不整形な遺構で、周囲を井戸や土坑などに囲まれる場所に位置する。本土坑の深さは12～15cmと一定するが、東西径は130～190cmとバラツキ、形態的な安定が見られない。また北端の調査区境では、底の深さがさらに20cmほど深くなり、土坑状の窪みとなる。この遺構は第3号土坑へと続くことから、第3号土坑の一部が複合する可能性もある。

第3号土坑 調査区の西部でも調査境に位置し、その南側を検出した。平面形は楕円形が想定される。規模は東西径140cm、深さ47cmを測り、覆土は茶褐色粘質土を主体とする。覆土の中程から土師質土器(第33図-2)が出土している。



1 / 150

第30图 下段平坦面实测图

第4号土坑 下段平坦面の西端に位置し、その東半分を検出した。検出部分の形状から平面形は長方形と推定され、その南辺に第2号溝が接合する。遺構の規模は南北径320cm、深さ59cmを測る。覆土の観察から下半分に堆積した灰褐色砂質土は、本遺跡の地山や他の遺構覆土と対比すると、水成堆積と判断可能な土である。接合する第2号溝などから流下した雨水などを一時的に溜める施設（水溜め）と考えられる。

第5号土坑 下段平坦地の中程で、崖状の丘陵斜面の裾に位置する大型の遺構である。形態は長方形の箱形を呈し、斜面裾を走る第1・2号溝が、その東西角に接合する。東西の長軸径516cm、南北の短軸径210cm、深さ55cmを測り、遺構の底は平坦に整えられている。覆土の土質と堆積の状況は、第4号土坑と極めて似通っていることから、第4号土坑と共に雨水などを一時的に溜める施設と考えられる。なおこの第5号土坑の上面と下面からは、小土坑が1基ずつ検出されているので、本項で併せて説明したい。

小土坑1 第5号土坑上面の濁灰褐色砂質土で確認された小型の土坑で、第5号土坑が埋没後に設定された遺構である。長軸径85cm、深さ15cmで平底形態を呈する。

小土坑2 第5号土坑の底近くに堆積した淡灰褐色砂質土の上面で確認された小型の土坑である。平面形は方形を呈して、長軸径112cm、短軸径88cm、深さ12cmを測る。

第6号土坑 調査区の中央部に位置する大型の遺構である。形態は略長方形に近く、その南側は第2号溝に接着している。南北の長軸径370cm、東西の短軸径204cm、深さ43cmを測る。土坑の底は平坦で、覆土は南側からの流入堆積した状況が確認されたが、その土質は第4号・第5号土坑のそれと近似することからしても、同一の性格を備えた遺構と判断される。

第7号土坑 下段平坦面の南辺を走る第1号溝の西端に位置して、第2号溝とも接合する遺構で、形態や規模の点から土坑に包括される。平面形は円形に近く、東西径95cm、深さ26cmを測る。底の標高は、第1号溝、本土坑、第2号溝の順で降下する。その位置と規模からして、第1号溝の「溜舛」的な機能が想定される土坑である。

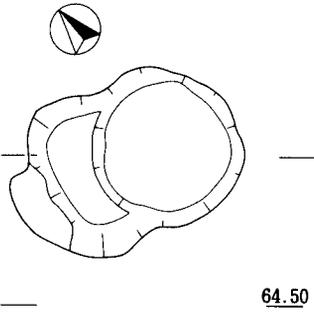
第8号土坑 調査区の北西隅にあって、第2号土坑と第4号土坑の間に位置する遺構である。深さは25cmを測るが、平面形・規模とも不明である。堆積土層は第4号土坑に類似する。

(3) 溝 (第30図・第31図 図版第17)

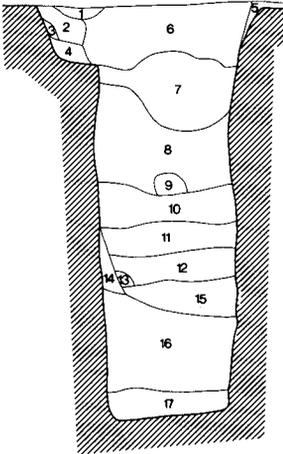
第1・2号溝 下段平坦面の南辺にあって、南側斜面の裾を並走する二条の溝で、南の丘陵斜面側を第1号溝、その東側を第2号溝として調査した。両溝とも東・西両端では識別されるが、それ以外の場所では複合が激しく識別が困難な状況にある。また両溝の規模は似ており、土層観察からしても明確に区別できにくい状況から、一条の溝が継起的に開削される過程で、その位置にずれを生じた可能性が高い遺構である。

第3号溝 調査区の中央を南北方向に走る小溝である。規模は幅22～46cm、深さ10cm前後を測り、第5号土坑の北西隅から北へ790cm以上延びる。溝底の標高は中程が高く、南北両端がやや降下する。第5号土坑と一体的に機能する排水施設であると考えられる。

なおこの溝の東には遺構が少なく、屋敷地内の広場的な空閑地であった可能性が考慮される。

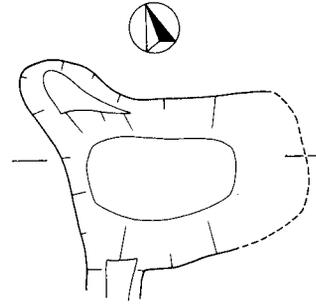


64.50

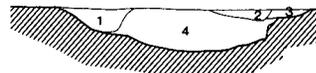


第1号井戸

- 1 黄褐色土
- 2 黄褐色土
- 3 黄褐色土
- 4 明黄褐色土
- 5 明黄褐色土
- 6 暗黄褐色土
- 7 暗黄褐色土
- 8 明黄褐色土
- 9 明黄褐色土
- 10 明黄褐色土
- 11 明黄褐色土
- 12 明黄褐色土
- 13 明黄褐色土
- 14 明黄褐色土
- 15 明黄褐色土
- 16 明黄褐色土
- 17 明黄灰褐色土



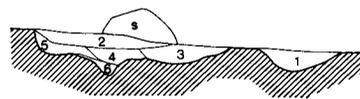
64.30



第1号土坑

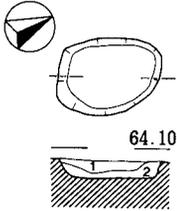
- 1 濁灰褐色粘質土
- 2 濁黄褐色砂質土
- 3 濁暗黄褐色粘質土
- 4 濁茶褐色粘質土

64.30



第1・2号溝断面1

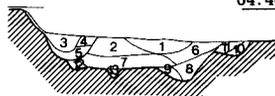
- 1. 濁暗灰褐色砂質土
- 2. 灰褐色砂質土
- 3. 暗灰褐色砂質土
- 4. 濁暗灰褐色粘質砂
- 5. 灰褐色砂質土
- 6. 暗灰色粘質砂



64.10

小土坑1

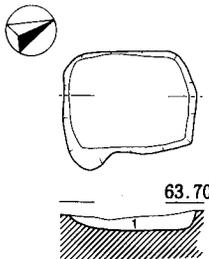
- 1 黒灰色炭化層
- 2 黄灰褐色砂質土



64.40

第1・2号溝断面2

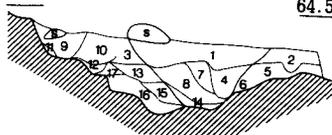
- 1 濁灰褐色砂質土
- 2 灰褐色砂質土
- 3 暗灰褐色砂質土
- 4 灰褐色砂質土
- 5 濁黄褐色砂質土
- 6 灰褐色砂質土
- 7 灰褐色砂質土
- 8 濁暗灰色砂質土
- 9 灰褐色砂質土
- 10 灰褐色砂質土
- 11 灰褐色砂質土
- 12 灰褐色砂質土
- 13 灰褐色砂質土



63.70

小土坑2

- 1 暗茶褐色粘質砂



64.50

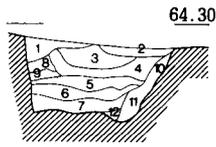
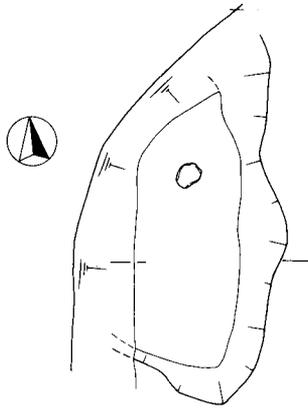
第1・2号溝断面3

- 1 灰褐色砂質土
- 2 濁灰褐色砂質土
- 3 濁灰褐色砂質土
- 4 濁暗灰褐色砂質土
- 5 濁灰褐色砂質土
- 6 濁灰褐色砂質土
- 7 濁灰褐色砂質土
- 8 暗灰褐色粘質砂
- 9 暗灰褐色粘質砂
- 10 灰褐色砂質土
- 11 暗灰褐色粘質砂
- 12 灰褐色砂質土
- 13 灰褐色砂質土
- 14 暗灰褐色粘質砂
- 15 灰褐色砂質土
- 16 灰褐色砂質土
- 17 暗灰褐色粘質砂



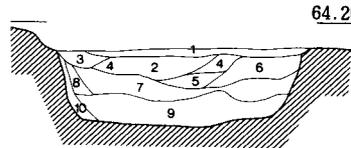
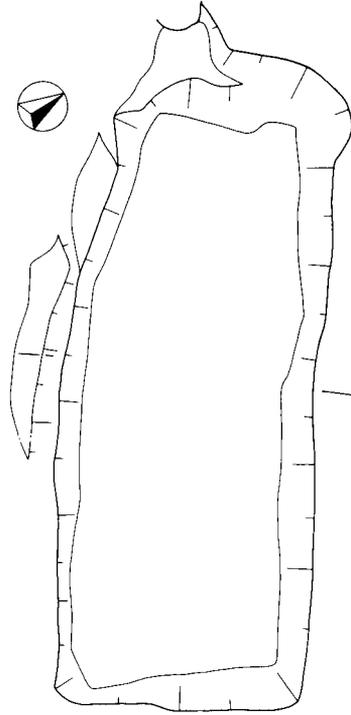
1/60

第31図 下段平坦面遺構実測図(1)



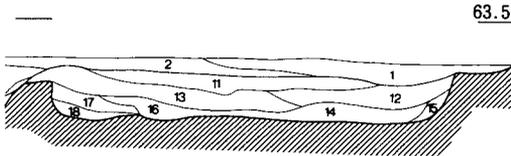
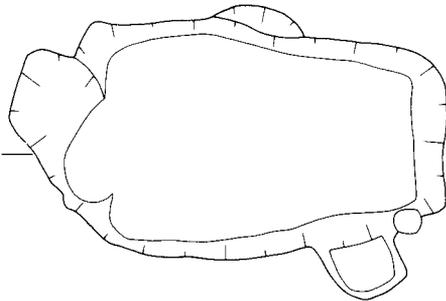
第4号土坑

- | | |
|------------|------------|
| 1 橙灰色質土 | 8 暗茶褐色粘質砂土 |
| 2 濁灰褐色質土 | 9 灰褐色粘質砂土 |
| 3 濁暗褐色粘質砂土 | 10 黄褐色砂質土 |
| 4 灰褐色粘質砂土 | 11 濁黄褐色砂質土 |
| 5 濁灰褐色粘質砂土 | 12 灰褐色砂質土 |
| 6 濁灰褐色粘質砂土 | |
| 7 灰褐色砂質土 | |



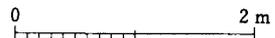
第5号土坑

- | | |
|-------------|---------------|
| 1 濁灰褐色砂質土 | 8 灰褐色粘質砂土 |
| 2 濁暗茶褐色粘質砂土 | 9 淡黄灰褐色砂質土 |
| 3 灰褐色砂質土 | 10 8と同質、粘質つよい |
| 4 灰褐色砂質土 | |
| 5 4と同じ、やや暗い | |
| 6 2と同じ | |
| 7 濁黄灰褐色粘質砂土 | |



第6号土坑

- | | |
|--------------|--------------|
| 1 濁灰褐色砂質土 | 16 14より灰色が強い |
| 2 暗灰褐色砂質土 | 17 濁黄褐色砂質土 |
| 11 灰褐色砂質土 | |
| 12 灰褐色砂質土 | |
| 13 灰褐色砂質土 | |
| 14 暗灰褐色粘質砂 | |
| 15 14に黒褐色地山土 | |



1/60

第32図 下段平坦面遺構実測図(2)

2. 遺物（第33図 図版第20）

下段平坦面からの出土遺物は、遺構の規模と箇所数に対して32点と数少ない内容である。種別としては土師質土器、越前焼、鉄釘などが出土した他に、包含層からは土師器、須恵器、内面黒色土器、肥前系磁器なども出土した。点数的には越前焼の陶片が多いが、小片が多く図化が可能な資料は少ない。

1・2は土師質の小皿で、共に浅黄橙色を呈する製品である。2は第3号土坑から出土した小皿で、口唇部を引き上げた特徴的な形態をみせる。口径9cm、器高1.9cmを測る。

3～6・11は越前焼の挿鉢と壺で、その多くは包含層からの出土した。遺構から出土品としては、11の破片が第2号井戸の脇や第2号溝から検出された。また3・4・11の3点の挿鉢は、口縁内面の形態に微細な違いを認めるが、その時期差はあまり無い個体と判断される。

11の挿鉢は口径43cmを測り、法量的にやや大型の製品である。内外とも橙色を呈して、密に施されたおろし目は、2.8cm幅の9条であるが、器面のすり減りは弱く、使用の頻度はあまり高くは無いようである。

5の壺は口径12.8cmを測る中型の製品である。胎土は砂粒の混入が少なく、明灰色を呈するが、焼成が良好のため器面は光沢がある赤褐色をみせている。6は壺の体部下半の破片であるが、その胎土の質感と器面の色調からしても、5の口縁と同一個体と判断される特徴をもつ。

土師質の小皿と越前焼の挿鉢や壺は、そのいずれが16世紀前半代の遺物である。

7・8は肥前系磁器で、包含層の上面からの出土である。7は白磁の小碗で、口径8.3cmを測る。また8はくすんだ染付の小碗で、高台径4.2cmを測る。

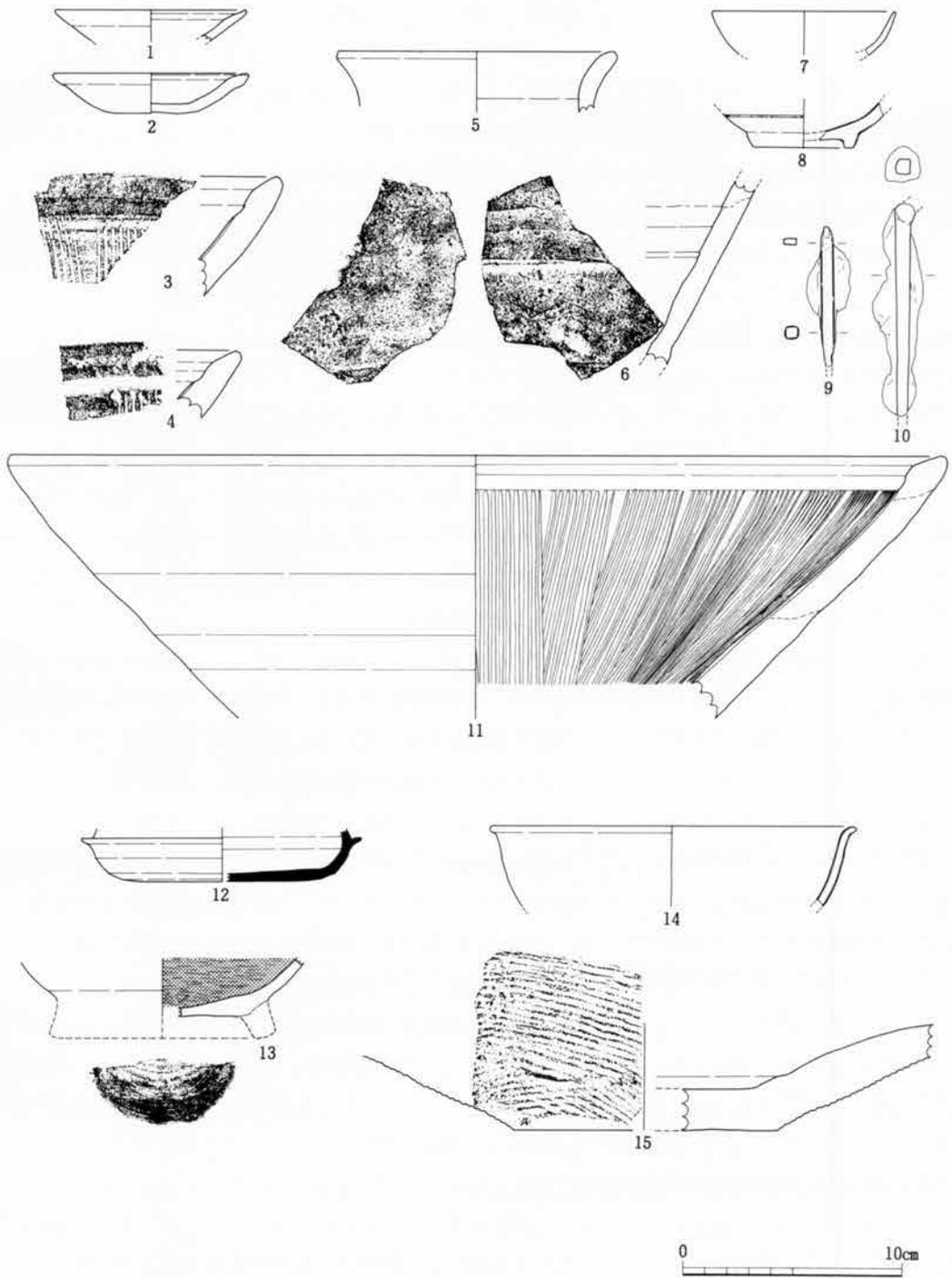
金属製品としては、断面四角の和釘が9点出土している。9は長さ6.5cm以上の製品で、一端の断面形から小型の鏝である可能性もある。10は長さ10cm以上と大型の釘である。法量と形態から三寸五分の規格品であると推定される。

12～15は第2次調査時に周辺の遺跡で表採した遺物で、本項で併せて報告したい。

12は第2次調査区の西に鎮座する天神社（第5図・第23図参照）の丘陵上に分布する古墳群からの採集品である。この古墳群は径6～15mを測る円墳5基から構成されが、その南端の斜面を切り落とした法面からの出土である。5世紀第三四半期と推定される。

13は第1次調査区のB地区近くで採集された内面黒色土器の碗で、10世紀後半代と考えられる。

14・15は東間集落の背後に広がる畑地に位置する東間ヨウショウジ遺跡で採集した中世陶磁器である。14は口径16.6cmの龍泉窯系の青磁碗で、釉は透明感があり、外面の削も強い。その特徴から14世紀末から15世紀前半の製品と推定される。15は珠洲焼甕の底部で、底径12cmを測る。外面のタタキは3cm幅9本と粗く、14の青磁碗と同時期の製品と推定される。



1 / 3

第33図 下段平坦面出土遺物実測図

第6章 ま と め

この紺屋町ダイラクボウ遺跡の発掘調査では、縄文時代の貯蔵穴群、中・近世の社殿跡や屋敷跡などの特徴ある遺構群を検出すると共に、各時代の遺物が出土している。これは発掘調査の範囲が、小規模な遺跡群を複合的な形で捉え、調査を実施した結果であるが、成因は当地の歴史にある。周辺遺跡の動向を踏まえ縄文時代と戦国・江戸時代の特徴を整理してまとめとしたい。

縄文時代 第1次調査のA地区西部で発見された縄文時代の貯蔵穴群は、植物食料として利用されたドングリ類・トチ・クリなどの地中保存に使用された遺構で、出土土器とドングリ類の理化学的な分析から、縄文時代後期末から晩期前葉にかけて設営されたことが知られる。また貯蔵穴群が検出された場所では、住居等の遺構が全く見られず、当地が貯蔵施設だけの立地に適合した土地であることを暗示している。当地は日照が丘陵と樹木でさえぎられた場所で、砂質の土地は地下水が浅く、かつてみられたクリの地中保存の条件と似た環境に所在することが知られる。

このため縄文時代の後期から晩期にかけて、本遺跡で貯蔵穴を設営した人々は、遺跡の営統期間が複合して、指呼の間に位置する縄文集落の東間たけのこし遺跡の住人と推定される。それは本遺跡A地区の沢状地形が、貯蔵穴群の東側で、東間たけのこし遺跡との間を流れ、さらし場等の加工施設の立地に適した地形が復元されことも関係する。

戦国・江戸時代 第2次調査の上下2段の平坦面では、戦国時代から江戸時代の社殿跡と屋敷跡を確認している。上段平坦面の社殿遺構は、建物構造に加えて、伝承される天神宮の移築時期の一致から、江戸時代に天神を祀った社殿の跡地と判断している。また下段平坦面の屋敷跡は、僧坊跡と判断する材料には欠けるが、上段平坦面の社殿が下段方向に面し、この屋敷地と一体的な配置を見せることか、伝承の僧坊「ダイラクボウ」が所在した屋敷地と推定している。

遺跡が立地する丘陵の西端に位置する菅原神社は、紺屋町集落の産土神として信仰される鎮守で、かつては天神と称していた。明治時代に村社に列せられ、明治33年に現在地で拝殿を新設し、丘陵上の天神社を奥宮と識別している。天神は古代末以降、神格化した菅原道真と同一視されているが、本来は天神7代の総称で、地神5代に先行して日本を治めた神と伝えられる。

菅原神社の由緒は別として、上段平坦面の社殿遺構は、戦国時代に創建され天神の宮として、江戸時代全般に渡り信仰され、「ダイラクボウ」がその管理を行っていた可能性が高い。当地を含め宝達山の峰や山麓には、修験道の里寺が多く所在したと伝えられるが、その実像は不明であるが、「ダイラクボウ」を「大楽坊」と理解し、修験道の里寺の一つとして位置付けたい。

本遺跡の縄文時代と戦国・江戸時代の特徴と性格の一部を概説したが、これ以外にも古墳時代や平安時代の遺構や土器資料から、多くの歴史事実の復元が可能と考えられるが、その課程には前田川流域の歴史動向をより詳説し、その流れの中に位置付ける必要があると考えられる。

图 版



紺屋町ダイラクボウ遺跡と周辺地域

(1/7,000)



(1) 第1次調査区の俯瞰(北から)



(2) 調査前の遺跡近景(東から)



(1) A地区中央部遺構検出状況(東から)



(2) A地区東部遺構検出状況(北から)



(1) 沢状地形の検出状況(西から)



(2) 小川状地形の検出状況(北から)



(1) A地区西部の貯蔵穴群(東から)



(2) A地区西部の貯蔵穴群(南から)



(1) 第1号貯蔵穴断面



(2) 第3号貯蔵穴断面



(1) 第7号貯蔵穴断面



(2) 第9号貯蔵穴断面



(1) 第12号貯蔵穴



(2) 第6号貯蔵穴のドングリ類



(1) 第14号貯藏穴断面



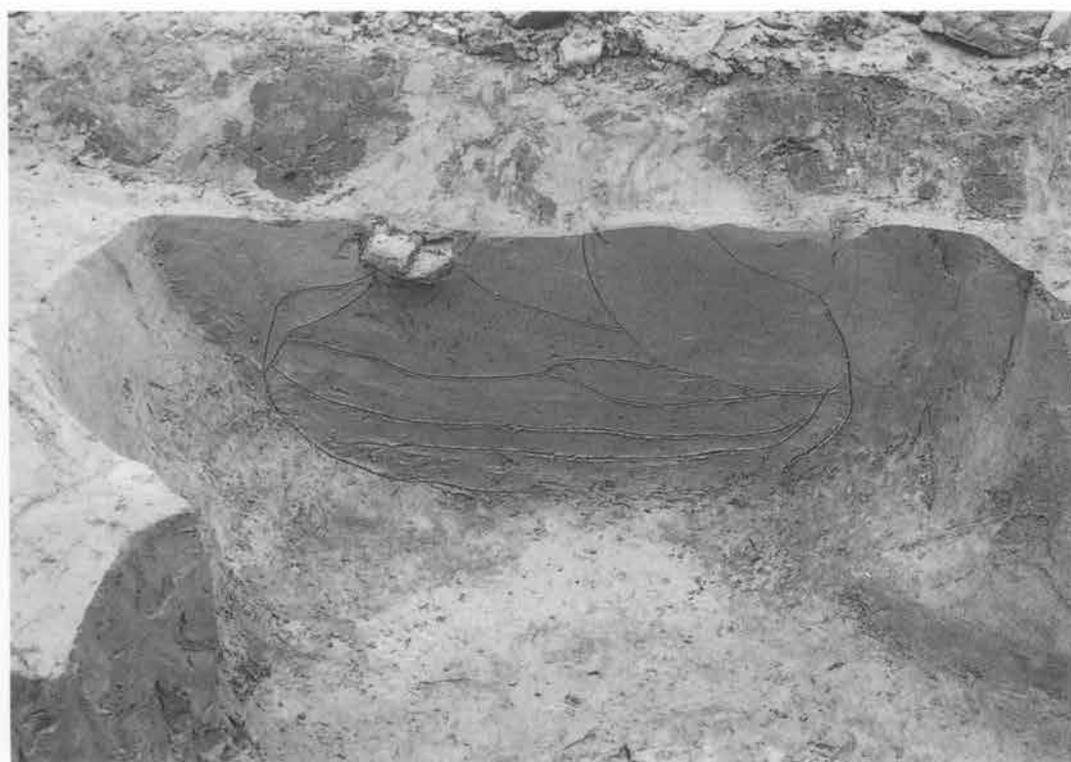
(2) 第15号貯藏穴断面



(1) 第18・20号貯蔵穴



(2) 第18号貯蔵穴のドングリ類



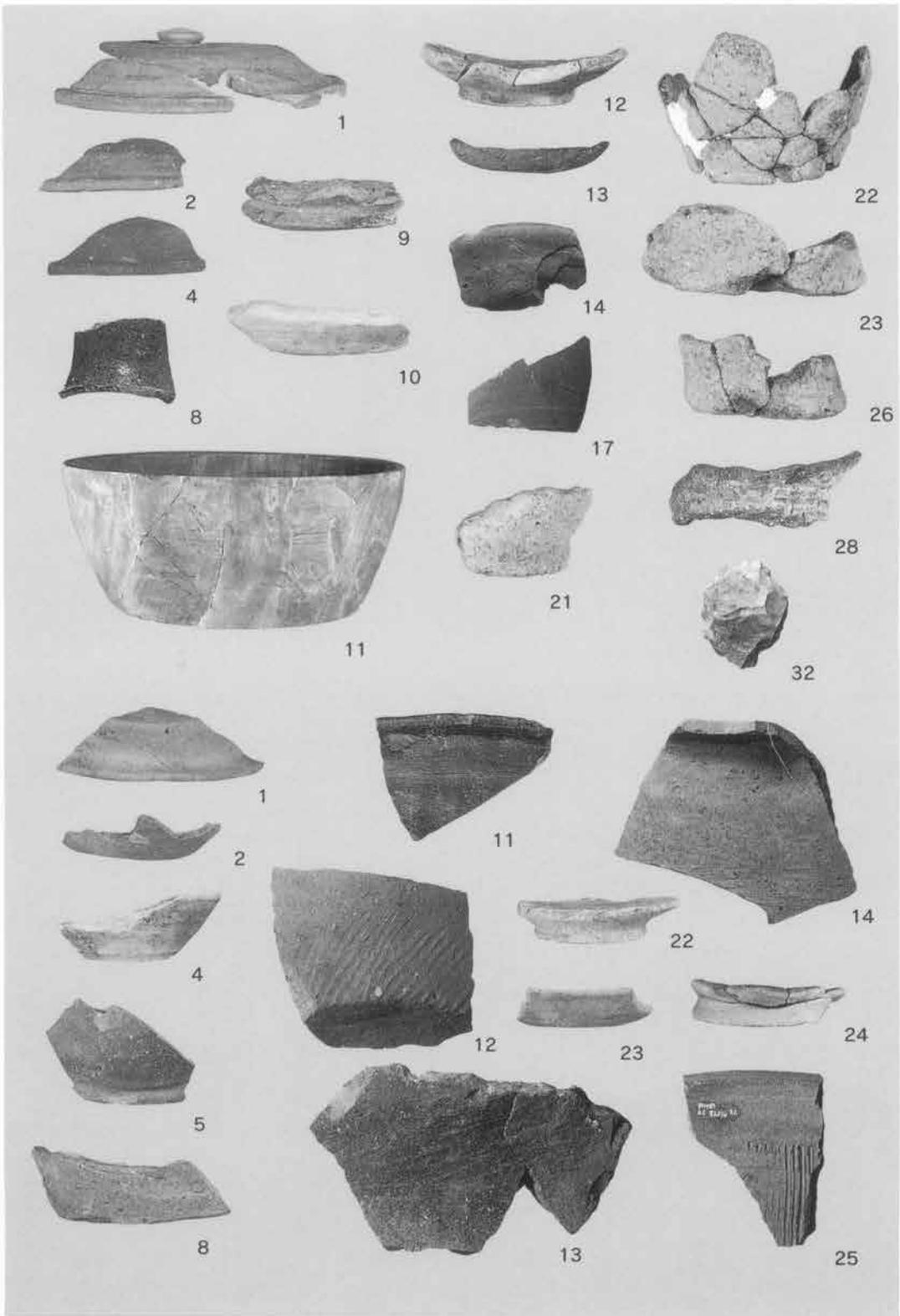
(3) 第21号貯蔵穴断面



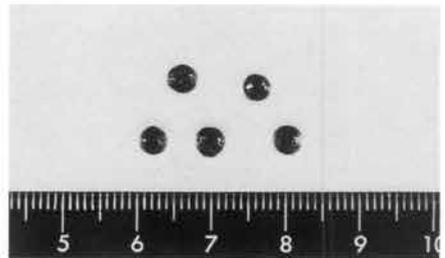
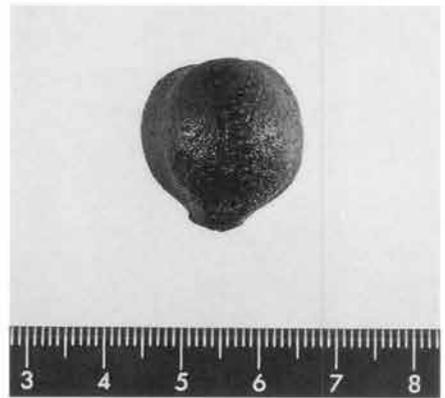
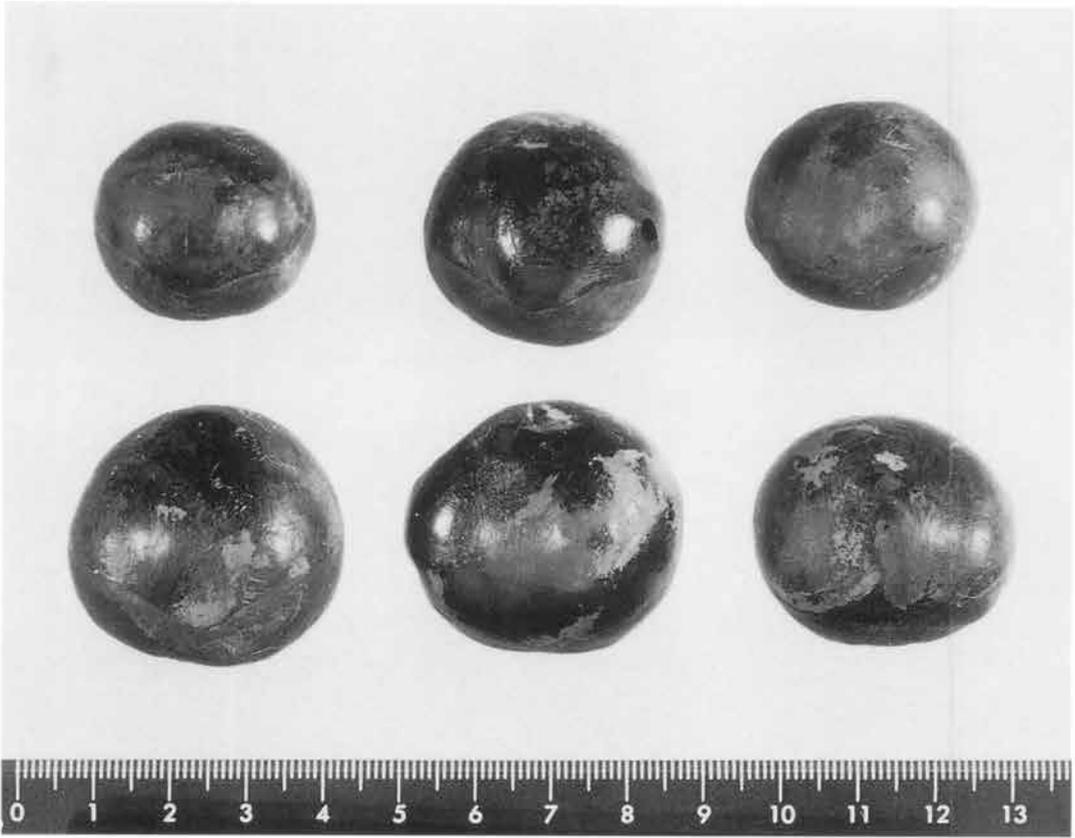
(1) B地区の検出状況(東から)



(2) 集石遺構(北から)



第1次調査区出土遺物 (上半第16図・第17図、下半第21図・第22図)





(1) 第2次調査上段平坦面(北から)



(2) 社殿跡検出状況(南から)



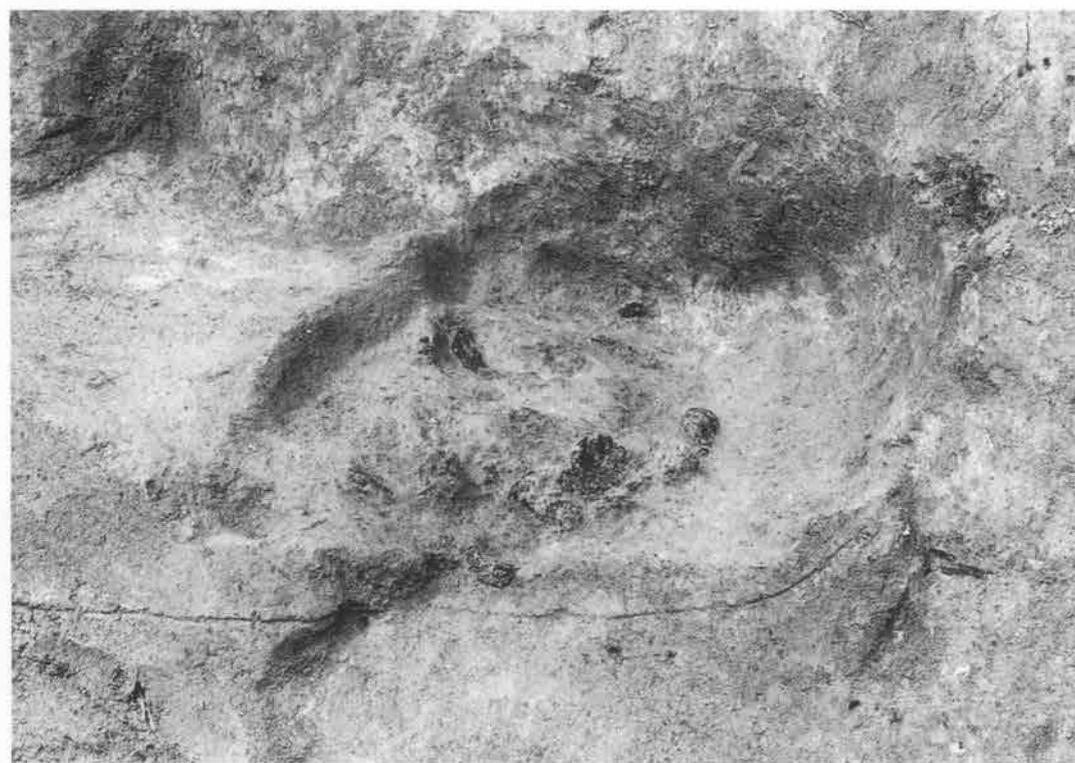
(1) 第1号土坑



(2) 第2号土坑



(1) 第3号土坑



(2) 第3号土坑炭化物出土状況



(1) 第2次調査下段平坦面(東から)



(2) 下段平坦面遺構検出状況(西から)



(1) 下段平坦面の調査風景(西から)



(2) 第1号井戸



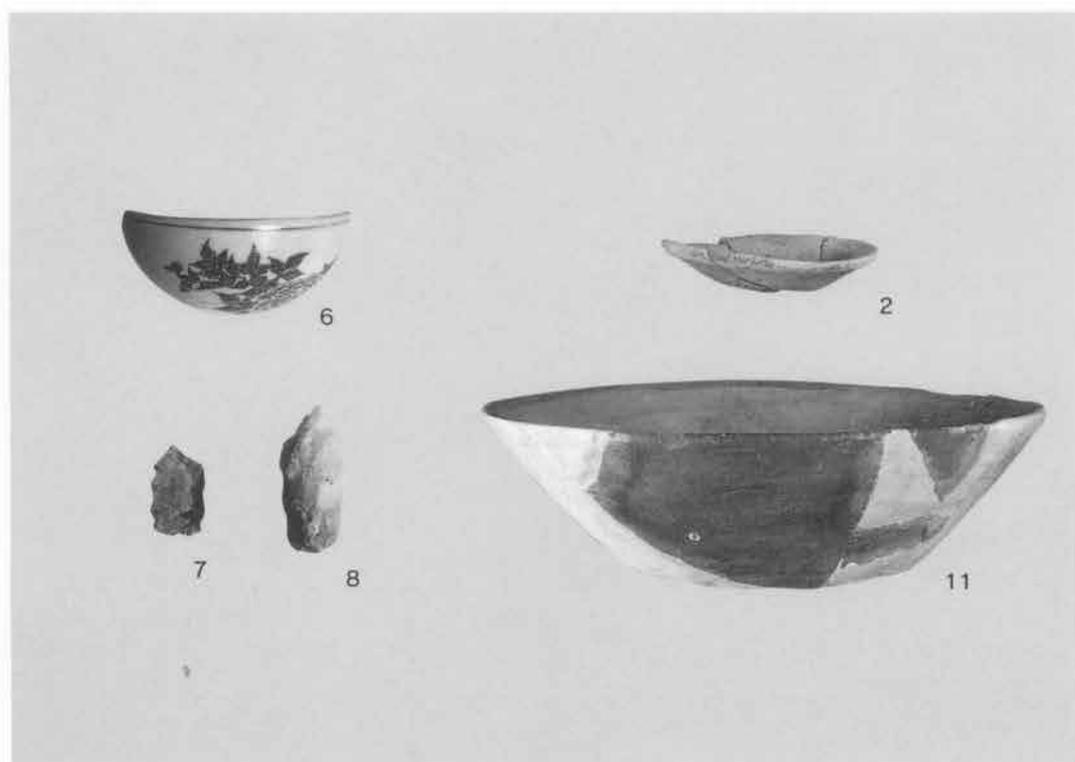
(1) 第4号土坑



(2) 第5号土坑



(1) 第6号土坑



(2) 第2次調査区出土遺物(左第29図、右第33図)

紺屋町ダイラクボウ遺跡

広域営農団地農道整備事業羽咋地区に
係る埋蔵文化財発掘調査報告書(その1)

平成6年 3月 18日 印刷

平成6年 3月 30日 発行

編集・発行 石川県立埋蔵文化財センター
石川県金沢市米泉町4丁目133番地
〒921 電話(0762)43-7692(代)

印刷 能登印刷株式会社

©石川県立埋蔵文化財センター 1994

本文用紙：書籍用紙イエロー（中性紙）72kg